

Oracle® Solaris 11.2 デスクトップ管理者ガイド

ORACLE®

Part No: E54054
2014 年 7 月

Copyright © 2012, 2014, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ, AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

このドキュメントの使用法	7
1 Oracle Solaris デスクトップの管理	11
デスクトップの概要	11
2 GConf を使用したユーザー設定の管理	13
GConf の概要	13
GConf リポジトリコンポーネント	14
構成ソース	15
スキーマ	16
スキーマ定義ファイル	17
GConf デーモン	18
GConf コマンド行ツールの使用	19
設定値の設定	21
一般設定	22
見た目と使い心地の設定	30
デフォルト設定値の復元	32
3 メニューのカスタマイズ	33
メニューの概要	33
メニュー定義ファイルの操作	34
ディレクトリエントリファイルの操作	36
デスクトップエントリファイルの操作	37
メニューの編集	39
システムメニューの追加および変更	39
ユーザーメニューの作成および変更	42
メニューのマージ	43
ユーザーメニューとシステムメニューのマージ	43
4 テーマのインストール	45

テーマの概要	45
テーマのインデックスファイル	46
コントロールオプションのインストール	47
ウィンドウ境界オプションのインストール	47
アイコンオプションのインストール	48
テーマ用アイコンのインストール	48
▼ テーマ用アイコンをインストールする方法	49
カスタムコントロールオプションの作成	50
▼ カスタムコントロールオプションを作成する方法	50
5 フォントのカスタマイズ	51
フォントの概要	51
fontconfig ライブラリ	52
レガシー X11 フォントシステム	53
フォントの置換	55
6 MIME タイプの使用	57
MIME タイプの概要	57
MIME データベースについて	58
MIME データベースの内容	59
MIME データベースのリフレッシュ	62
MIME タイプ XML ファイルの理解	62
MIME タイプの変更	64
▼ MIME タイプを追加または変更する方法	65
アプリケーションの MIME タイプの登録	67
▼ MIME タイプにアプリケーションを登録する方法	68
▼ MIME タイプをアプリケーションと関連付ける方法	69
7 スクリーンセーバーの管理	71
スクリーンセーバー設定の設定	71
すべてのユーザーのデフォルトスクリーンセーバー設定の設定	71
スクリーンセーバー設定の変更	72
スクリーンセーバーの見た目と使い心地の変更	72
▼ スクリーンセーバー表示を追加する方法	72
スクリーンセーバー表示の無効化	73
8 セッションの管理	75
セッションマネージャーの概要	75

セッションのデフォルトの設定	75
デフォルトセッション設定の復元	77
デフォルトセッションとしての現在のセッションの保存	77
9 Yelp ヘルプブラウザの概要	79
オンラインヘルプのソースドキュメント	79
Open Source Metadata Framework ファイル	80
Rarian カタログ作成システム	80
10 Oracle Solaris デスクトップシステムのパフォーマンス向上	81
CPU 使用率の削減	81
テーマオプションの使用	82
メニューのアイコン表示の無効化	83
パネルアニメーションの無効化	83
デスクトップの背景での単一色の使用	83
ファイルマネージャーのパフォーマンス向上	84
適切なウィンドウマネージャーの使用	86
X Window System のネットワークトラフィックの削減	86
色の使用量の削減と表示品質の向上	87
11 Oracle Solaris デスクトップシステムでの機能の無効化	89
ロックダウン設定の設定	89
ロック画面の無効化	89
ログアウトの無効化	90
コマンド行操作の無効化	90
パネル構成の無効化	91
12 X Window System の操作	93
X Window System の概要	93
X サーバプロセスの理解	94
X サーバの操作	94
X クライアントの操作	95
Oracle Solaris での X サーバの構成	97
Xorg 構成ファイルの操作	97
SMF 構成プロパティの操作	98
HAL fdi ファイルの操作	98
X11 デ스플레이へのアクセス	99
その他のユーザーアカウントに対するディスプレイへのアクセスの提供	100

リモートマシンからのクライアントの表示	101
VNC を使用したリモートデスクトップアクセスの設定	101
▼ ゲストのグラフィカルログインを提供するように VNC を設定する方法	102
▼ VNC を手動で起動する方法	102
A 隠しディレクトリ	105
用語集	107
索引	109

このドキュメントの使用方法

- **はじめに** – 『Oracle® Solaris 11.2 デスクトップ管理者ガイド』では、Oracle Solaris デスクトップを実行するシステムを管理する方法について説明します。このガイドの情報のほとんどは、デスクトップのすべてのリリースで共通です。共通の情報でない場合は、プラットフォームが示されます。
- **対象読者** – このガイドは、システム管理者および Oracle Solaris デスクトップの使用に関心のあるユーザーを対象にしています。
- **前提知識** – ハードウェアのトラブルシューティングや交換に関する豊富な経験。

内容の紹介

このガイドは、次のように構成されています。

- **第1章「Oracle Solaris デスクトップの管理」**では、Oracle Solaris デスクトップ (GNOME デスクトップバージョン 2.30.2 をベースとする) を管理するために使用される基本コンポーネントの一部について説明します。
- **第2章「GConf を使用したユーザー設定の管理」**では、GNOME 構成フレームワーク (GConf) を使用して、すべてのユーザーの必須およびデフォルトのデスクトップ設定を行う方法について説明します。
- **第3章「メニューのカスタマイズ」**では、Oracle Solaris デスクトップでメニューを実装する方法、およびメニューをカスタマイズする方法について説明します。
- **第4章「テーマのインストール」**では、デスクトップの視覚的外観を制御する設定、それらの設定をテーマへと編成する方法、および新規テーマを作成およびインストールする方法について説明します。
- **第5章「フォントのカスタマイズ」**では、新規フォントをインストールする方法、およびフォントの置換を作成する方法について説明します。
- **第6章「MIME タイプの使用」**では、アプリケーションが MIME タイプを検出する方法、MIME タイプを登録する方法、およびアプリケーションをデスクトップに追加する方法について説明します。

- [第7章「スクリーンセーバーの管理」](#)では、スクリーンセーバー設定を行う方法について説明します。この章では、スクリーンセーバーに使用可能なディスプレイを変更する方法についても説明します。
- [第8章「セッションの管理」](#)では、セッション管理について紹介し、セッションのデフォルトを設定する方法について説明します。
- [第9章「Yelp ヘルプブラウザの概要」](#)では、Oracle Solaris デスクトップシステムのヘルプシステムについて説明します。
- [第10章「Oracle Solaris デスクトップシステムのパフォーマンス向上」](#)では、必要に応じて CPU 使用率および X Window System のネットワークトラフィックを削減する方法、および 8 ビットディスプレイで表示品質を最適化する方法について説明します。
- [第11章「Oracle Solaris デスクトップシステムでの機能の無効化」](#)では、デスクトップの一部の機能についてユーザーによるアクセスやカスタマイズを回避する方法について説明します。
- [第12章「X Window System の操作」](#)では、Oracle Solaris OS で使用可能な X Window System の概要について説明します。
- [付録A 隠しディレクトリ](#)では、Oracle Solaris デスクトップシステムがユーザーのホームディレクトリに追加する隠し構成ディレクトリについて説明します。

製品ドキュメントライブラリ

この製品の最新情報や既知の問題は、ドキュメントライブラリ (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=E36784>) に含まれています。

Oracle サポートへのアクセス

Oracle のお客様は、My Oracle Support を通じて電子的なサポートを利用することができます。詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> を参照してください。聴覚に障害をお持ちの場合は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

フィードバック

このドキュメントに関するフィードバックを <http://www.oracle.com/goto/docfeedback> からお聞かせください。

◆◆◆ 第 1 章

Oracle Solaris デスクトップの管理

この章では、Oracle Solaris デスクトップ (GNOME デスクトップバージョン 2.30.2 をベースとする) を管理するために使用される基本コンポーネントの一部について説明します。

一般的な管理タスクには、ユーザー設定の設定、メニューおよびフォントのカスタマイズ、テーマのインストール、スクリーンセーバーの管理などがあります。このガイドの各章では、これらの管理タスクを実行する方法について詳細を説明します。

デスクトップの概要

Oracle Solaris 11 のデフォルトのデスクトップ環境は、Oracle Solaris デスクトップ (GNOME Foundation からの GNOME 2.30.2 が含まれています) です。デスクトップは、画面上にあるその他のすべてのコンポーネントの背後に位置します。表示されているウィンドウがない状態で、デスクトップは画面で上部パネルと下部パネルの間にある部分です。デスクトップ上で簡単にアクセスできるようにするため、ファイルおよびフォルダを配置できます。

デフォルトで、次のアイコンがデスクトップに表示されています。

- コンピュータアイコン - CD、リムーバブルメディア (フロッピーディスクなど)、およびファイルシステム全体 (ルートファイルシステムとも呼ばれる) へのアクセスを提供します。デフォルトで、その他のユーザーのファイルを読み取ったりシステムファイルを編集したりするためのセキュリティアクセス権は持っていません。
- ホームフォルダ - ユーザーの個人ファイルを格納します。このフォルダは「場所」メニューから開くこともできます。
- ごみ箱 - ユーザーが削除して不要になったファイルおよびフォルダを含みます。

Oracle Solaris デスクトップの詳細は、『[Oracle Solaris 11.2 Desktop User's Guide](#)』を参照してください。

Oracle Solaris OS で使用可能な X Window System の概要は、[第12章「X Window System の操作」](#)を参照してください。

◆◆◆ 第 2 章

GConf を使用したユーザー設定の管理

この章では、GNOME 構成フレームワーク (GConf) を使用し、GConf でユーザー設定を管理する方法について説明します。

この章には次の情報が含まれます。

- 13 ページの「GConf の概要」
- 14 ページの「GConf リポジトリコンポーネント」
- 18 ページの「GConf デーモン」
- 19 ページの「GConf コマンド行ツールの使用」
- 21 ページの「設定値の設定」
- 32 ページの「デフォルト設定値の復元」

GConf の概要

GConf は、デスクトップおよびアプリケーションの構成設定を格納するために、Oracle Solaris デスクトップ環境によって使用されるフレームワークです。GConf は、Oracle Solaris デスクトップユーザーの設定の管理を簡単にします。

GConf を使用すると、システム管理者は次のタスクを実行できます。

- すべてのユーザーに対して特定の設定の必須の値を設定します。このようにすることで、システム管理者はユーザーが特定の設定を更新できるかどうかを制御できます。
- すべてのユーザーに対して特定の設定のデフォルトの値を設定します。
- 定義ファイル内で指定された設定の推奨値を使用します。

GConf はまた、設定値が変更されたときにネットワークを介してアプリケーションに通知します。設定を変更すると、その設定を使用するすべてのアプリケーションがすぐに更新されます。

GConf には、次のコンポーネントがあります。

- ユーザー設定のリポジトリ

- デーモン `gconfd-2`
- コマンド行ツール `gconftool-2`

GConf リポジトリコンポーネント

GConf リポジトリは、単純なファイルシステムのように構成され、階層に編成されているキーが含まれます。それぞれのキーは、さらに多くのキーを含むディレクトリであるか、または値を持ちます。

リポジトリは、アプリケーションの種類に基づいて論理グループへと編成され、次のディレクトリが含まれます。

- GConf リポジトリを使用するアプリケーションに対応するディレクトリ。次のディレクトリがあります。
 - `system`
 - `desktop`
 - `apps`

たとえば、ファイルシステムにはディレクトリ `/apps/metacity` が含まれます。

- 設定のカテゴリに対応するサブディレクトリ。

たとえば、ファイルシステムにはディレクトリ `/apps/metacity/general` が含まれます。
- スキーマファイルが含まれる `schemas` という名前のディレクトリ。スキーマファイルは、すべての設定キーを記述します。

GConf リポジトリ内の各設定は、キーと値のペアで表されます。1 つの GConf 設定キーは、リポジトリ内で 1 つのアプリケーション設定に対応する要素です。たとえば、`/apps/gnome-session/options/show_splash_screen` 設定キーは、「セッション」設定ツールの「起動時にスプラッシュスクリーンを表示する」に対応します。

設定キーは、通常、次のような単純データ型を持ちます。

- 文字列
- 整数
- 文字列のリスト
- 整数のリスト

リポジトリ内の設定キーの形式は、リポジトリの読み取りに使用される Extensible Markup Language (XML) バックエンドモジュールに依存します。次は、XML バックエンドモジュール

がリポジトリの読み取りに使用されるときの `/desktop/gnome/interface/font_name` 設定キーの例です。

```
<entry name="font_name" mtime="1038323555" muser="user123" type="string">
  <stringvalue>Sans 10</stringvalue>
</entry>
```

注記 - このガイドで設定キーを参照するときは、キーへのパスがキーの名前に追加されます。たとえば、`/desktop/gnome/interface` サブディレクトリの `font_name` 設定キーは、`/desktop/gnome/interface/font_name` のように参照されます。

構成ソース

GConf リポジトリには、構成ソースと呼ばれる一連の保管場所が含まれます。構成ソースは、`/etc/gconf/2` ディレクトリにある GConf パスファイルに記載されています。

パスファイルは、次の情報を構成ソースごとに指定します。

- リポジトリを読み取るために使用するバックエンドモジュール
- リポジトリに対するアクセス権
- リポジトリの場所

GConf パスファイルには、`include` 命令も含まれます。デフォルトで、GConf パスファイルの内容は次のとおりです。

```
xml:readonly:/etc/gconf/gconf.xml.mandatory
include /etc/gconf/2/local-mandatory.path
include "${HOME}/.gconf.path"
include /etc/gconf/2/local-defaults.path
xml:readwrite:${HOME}/.gconf
xml:readonly:/etc/gconf/gconf.xml.defaults
```

GConf は、設定値を検索するときに、パスファイルで指定された順序で構成ソースを読み取ります。次の表では、パスファイル内の構成ソースについて説明します。

構成ソース	説明
必須	構成ソースに対するアクセス権は、読み取り専用で設定されています。ユーザーは、このソースの値を上書きできません。そのため、ソース内の設定は必須です。
ユーザー	構成ソースは、ユーザーのホームディレクトリ内の <code>.gconf</code> ディレクトリに格納されます。ユーザーが設定を行うと、新規設定情報がこの場所に追加されます。 構成エディタアプリケーションを使用してユーザー構成ソースを変更できます。

構成ソース	説明
デフォルト	構成ソースには、デフォルト設定が含まれます。

GConf は、設定を次の優先順位で適用します。

1. 必須設定
2. ユーザーが指定した設定
3. デフォルト設定

GConf パスファイルの `include` 命令によって、その他の構成ソースを指定できます。

含められる構成ソース	説明
<code>/etc/gconf/2/local-mandatory.path</code>	この構成ソースを使用して、特定システムの必須設定の値を格納します。
<code>\$(HOME)/.gconf.path</code>	ホームディレクトリ内の <code>.gconf.path</code> ファイルで、構成ソースの場所を指定します。
<code>/etc/gconf/2/local-defaults.path</code>	この構成ソースを使用して、特定システムのデフォルト設定の値を格納します。

スキーマ

GConf スキーマは、GConf スキーマキーと GConf スキーマオブジェクトの総称です。スキーマキー、スキーマオブジェクト、およびそれらと設定キーとの関係は、次のように定義されます。

- 設定キー – GConf リポジトリ内の要素で、アプリケーション設定に対応します (たとえば `/desktop/gnome/interface/font_name`)。
- スキーマキー – 設定キーのスキーマオブジェクトを格納するキー (たとえば `/schemas/desktop/gnome/interface/font_name`)。
- スキーマオブジェクト – 構成ソース内で設定キーに関する次の情報を含む要素:
 - 設定キーを使用するアプリケーションの名前
 - 設定キーに必要な値の型 (たとえば整数、ブール型など)。
 - 設定キーのデフォルト値
 - 設定キーに関する簡単なドキュメント

たとえば、`/schemas/desktop/gnome/interface/font_name` キーのスキーマオブジェクトは次のようになります。

```

<schema>
  <applyto>/desktop/gnome/interface/font_name</applyto>
  <key>/schemas/desktop/gnome/interface/font_name</key>
  <owner>gnome</owner>
  <type>string</type>
  <default>Sans 10</default>
  <locale name="C">
    <short>Default font</short>
    <long>Name of the default font used by gtk+.</long>
  </locale>
</schema>

```

スキーマキーは設定キーと関連付けることができます。たとえば、`/desktop/gnome/interface/font_name` キーには次のスキーマキーが含まれます。

```

<entry name="font_name" mtime="1034873859"
schema="/schemas/desktop/gnome/interface/font_name"/>

```

スキーマキーを設定キーと関連付けると、設定ではスキーマキーのスキーマオブジェクトで指定された推奨値が使用されます。推奨値は、スキーマオブジェクトの `<default>` 要素に含まれます。デフォルトで、デフォルト構成ソース内のすべての設定キーは、スキーマキーと関連付けられています。通常、スキーマはデフォルト構成ソースに格納されます。

スキーマ定義ファイル

スキーマはスキーマ定義ファイルから生成されます。スキーマ定義ファイルは、特定アプリケーションに関するすべてのキーの特性を定義し、新規構成ソースを作成するために使用されます。スキーマ定義ファイルは、`.schemas` 拡張子を持ち、`/etc/gconf/schemas` ディレクトリ内に含まれています。

一部のスキーマ定義ファイルは、Oracle Solaris デスクトップのユーザーインタフェースの部分と密に対応しています。たとえば、`system_http_proxy.schemas` ファイルは、「インターネット」設定ツールでの設定に対応するキーを記述します。

その他のスキーマ定義ファイルは、Oracle Solaris デスクトップのユーザーインタフェースによって公開されていないキーを記述します。たとえば、`panel-global.schemas` ファイルは、`/apps/panel/global/tooltips_enabled` キーを記述します。ツールチップがデスクトップパネルに表示されるかどうかを制御するこのキーは、どのデスクトップ設定ツールの設定としても公開

されていません。そのようなキーは、`gconftool-2` コマンドを使用して変更できる場合があります。詳細は、[19 ページの「GConf コマンド行ツールの使用」](#)を参照してください。

Oracle Solaris デスクトップのユーザーインターフェースのいくつかの部分には、複数のスキーマ定義ファイルからの GConf キーを表す設定が含まれます。たとえば、「キーボードショートカット」設定ツールには、`panel-global-config.schemas` および `metacity.schemas` ファイルからのキーを表す設定が含まれます。

GConf デーモン

GConf デーモンは `gconfd-2` と呼ばれます。GConf デーモンは、設定値が変更されたときにアプリケーションに通知します。たとえば、メニューとツールバーの設定ツールで、ツールバーにアイコンのみが表示されるように選択したとします。設定ツールでこのオプションを選択すると、すべての開いているアプリケーションのツールバーがすぐに更新されます。GConf デーモンは、ローカルでもネットワークを介しても動作できます。

デフォルトで、GConf デーモンのインスタンスは、ユーザーごとに起動されます。GConf デーモンは、認証やデータの安全性のような複雑な問題を処理しません。GConf デーモンは、起動すると GConf パスファイルを `/etc/gconf/version/path` ディレクトリからロードします。GConf デーモンは、アプリケーションと構成ソースの間のすべてのアクセスを管理します。

アプリケーションが設定キーの値をリクエストすると、GConf デーモンは次のプロセスを使用して構成ソースを特定の順序で検索します。

1. パスファイルで指定された順序で、各構成ソースの設定キーの値を検索します。値が見つかった場合は、その値を返します。
2. 値が見つからない場合は、パスファイルで指定された順序で、各構成ソースの設定キーに対応するスキーマキーを検索します。
3. スキーマキーが見つかった場合は、スキーマキーの値をチェックします。
4. スキーマキーの値がスキーマオブジェクトの場合は、スキーマオブジェクトの `<default>` 要素の推奨値を返します。

GConf デーモンは、設定キーの値のキャッシュも行います。すべてのアプリケーションでこのキャッシュを使用できるため、アプリケーションが構成ソースにアクセスする必要があるのは 1 回のみです。

GConf デーモンを停止するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --shutdown
```

GConf コマンド行ツールの使用

GConf にはコマンド行ツール `gconftool-2` が含まれています。`gconftool-2` コマンドを使用して、次のタスクを実行できます。

- キーの値を設定します
- キーの値を表示します
- アプリケーションをインストールするときに、スキーマ定義ファイルからスキーマをインストールします

たとえば、`/desktop/gnome` ディレクトリとサブディレクトリ内のすべてのキーの値を表示するには、次のコマンドを使用します。

```
# gconftool-2 --recursive-list /desktop/gnome
```

次の表では、`gconftool-2` コマンドで使用できるオプションの一部を説明します。詳細なコマンド行オプションについては、`gconftool-2(1)` のマニュアルページを参照してください。

表 2-1 gconftool-2 コマンド行のオプション

オプション	機能
<code>--all-dirs</code>	指定されたディレクトリ内のすべてのサブディレクトリを一覧表示します。
<code>--all-entries</code>	指定されたディレクトリ内のすべてのキーの値を表示します。
<code>--config-source=configuration-source</code>	このオプションを <code>--direct</code> オプションと一緒に使用して、使用する構成ソースを指定します。 注記 - このオプションで構成ソースを指定しない場合、パスファイル内のすべての構成ソースに対してコマンドが実行されます。
<code>--direct</code>	このオプションを <code>--config-source</code> オプションと一緒に使用して、構成ソースに直接アクセスします。このオプションを使用すると、GConf はサーバーをバイパスします。 注記 - このオプションを使用する前に、GConf デモン <code>gconfd-2</code> が実行中ではないことを確認してください。
<code>--dump</code>	指定された GConf リポジトリディレクトリ内のすべての設定キーが含まれるリストを生成します。リストには、すべてのキーの XML 記述が含まれます。リストは、 <code><gconfentryfile></code> 要素に含まれます。 たとえば、このオプションからの出力をリダイレクトして、パネル構成に関するすべてのキーを一覧表示するファイルを生成できます。このファイルに対して <code>--load</code> オプションを使用できます。
<code>--get</code>	指定された設定キーの値を表示します。また、指定されたスキーマキーに対するスキーマオブジェクト内の要素の値を表示します。
<code>--help</code>	<code>gconftool-2</code> コマンド、および <code>gconftool-2</code> コマンドで使用できるオプションに関するヘルプメッセージを表示します。

オプション	機能
<code>--load=filename</code>	構成ソース内の現在のディレクトリ内にある設定キーの値を、指定されたファイル内の値に設定します。指定するファイルの <code><gconfentryfile></code> 要素には、キーの XML 記述が含まれている必要があります。
<code>--long-desc=description</code>	このオプションを <code>--set-schema</code> オプションと一緒に使用して、スキーマキーの長い説明を指定します。
<code>--makefile-install-rule</code>	スキーマ定義ファイルをアプリケーションにインストールします。
<code>--owner=owner</code>	このオプションを <code>--set-schema</code> オプションと一緒に使用して、スキーマキーの所有者を指定します。
<code>--recursive-list</code>	指定されたディレクトリ内のすべてのサブディレクトリ内のすべての設定キーの値を表示します。
<code>--recursive-unset</code>	ディレクトリ内のすべてのサブディレクトリ内のすべての設定キーの値を、デフォルトの構成ソースの設定にリセットします。
<code>--set</code>	<p>設定キーの値を設定し、値をユーザー構成ソースに書き込みます。<code>--type</code> オプションを <code>--set</code> オプションと一緒に使用して、設定する値のデータ型を指定します。</p> <p>たとえば次のコマンドは、ユーザー構成ソースの <code>/apps/gnome-terminal/profiles/Default/background_color</code> キーの値を設定します。</p> <pre># gconftool-2 --set \ "/apps/gnome-terminal/profiles/Default/background_color" \ --type string "#000000"</pre> <p><code>--direct</code> オプションおよび <code>--config-source</code> オプションを <code>--set</code> オプションと一緒に使用して、別の構成ソースに値を書き込むこともできます。</p>
<code>--set-schema</code>	<p>スキーマキーの属性の値を設定し、値をデフォルト構成ソースに書き込みます。</p> <p>次のオプションを <code>--set-schema</code> オプションと一緒に使用して、更新する属性を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ <code>--type</code> ■ <code>--short-desc</code> ■ <code>--long-desc</code> ■ <code>--owner</code> <p>たとえば、次のコマンドは <code>/apps/gnome-terminal/profiles/Default/background_color</code> キーに対してスキーマキーの短い説明を設定します。</p> <pre># gconftool-2 --set-schema \ "/schemas/apps/gnome-terminal/profiles/Default/background_color" \ --short-desc "Terminal background color"</pre>

オプション	機能
	--short-desc "Default background color of terminal"
<code>--short-desc=description</code>	このオプションを <code>--set-schema</code> オプションと一緒に使用して、スキーマキーの短い説明を指定します。
<code>--shutdown</code>	GConf デーモンを終了します。
<code>--type=data-type</code>	このオプションを使用して、設定キーの値を設定するときのデータ型を指定します。スキーマキーの属性の値を設定するときこのオプションを使用することもできます。有効なデータ型は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ bool ■ float ■ int ■ list ■ pair ■ string
<code>--unset</code>	ユーザー設定からの設定キーの値を、デフォルト構成ソースの設定にリセットします。

注記 - マルチユーザー環境では、Sun Ray クライアントや VNC ビューアなど、複数のクライアントに対してサーバーがデスクトップ環境を提供するようにサーバーを設定できます。クライアントに提供されるデスクトップ環境は、優れたパフォーマンスと操作性が得られるように最適化できます。

デスクトップ環境の最適化は、`group/feature/multi-user-desktop` Image Packaging System (IPS) パッケージで利用できます。デスクトップの最適化を可能にするには、この IPS パッケージをサーバーにインストールする必要があります。詳細は、『[Optimizing the Oracle Solaris Desktop for a Multi-User Environment](#)』を参照してください。

設定値の設定

設定キーの必須値またはデフォルト値を設定できます。必須値は管理者のみが設定でき、ユーザーがそれらの値をオーバーライドすることはできません。ただし、ユーザーはデフォルト値を変更できます。

必須設定値またはユーザーのデフォルト設定値を変更する前に、どのユーザーに対しても GConf デーモンが実行されていないことを確認する必要があります。ユーザーの設定値を変更する前に、すべてのユーザーがログアウトしていることを確認してください。

設定キーの必須値またはデフォルト値を設定するには、次のように `gconftool-2` コマンドを使用します。

```
# gconftool-2 --direct \  
--config-source configuration-source \  
--type data-type \  
--set preference-key value
```

たとえば、必須 HTTP プロキシホストとして `www.proxy.xyz.com` を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct \  
--config-source xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.mandatory \  
--type string --set /system/http_proxy/host www.proxy.xyz.com
```

注記 - ユーザーはこの必須設定値をオーバーライドできません。

`gconftool-2` コマンドを使用してデフォルト値を設定することもできます。たとえば、ワークスペースのデフォルト数を 5 に設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct \  
--config-source xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.defaults \  
--type int --set /apps/metacity/general/num_workspaces 5
```

注記 - ユーザーは、このデフォルト設定値をオーバーライドできます。

一般設定

以降のセクションでは、必須またはデフォルト値を一般設定に割り当てる方法について説明します。

HTTP プロキシ設定

HTTP プロキシ設定を行うには、`/system/http_proxy/` の場所で設定キーの値を変更します。たとえば、HTTP プロキシホストの必須値を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct --config-source \  
xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.mandatory --type string \  
--set /system/http_proxy/host proxy-name
```

HTTP プロキシホストのデフォルト値を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct --config-source \  
xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.defaults --type string \  
--set /system/http_proxy/host proxy-name
```

HTTP プロキシ関連のその他の設定を行うこともできます。その他の HTTP プロキシ設定については、`system_http_proxy.schemas` スキーマ定義ファイルを参照してください。

ワークスペースの数

必須のワークスペース数を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct --config-source \  
xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.mandatory --type int \  
--set /apps/metacity/general/num_workspaces integer
```

デフォルトのワークスペース数を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct --config-source \  
xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.defaults --type int \  
--set /apps/metacity/general/num_workspaces integer
```

ウィンドウマネージャーのその他の設定を行うこともできます。その他のウィンドウマネージャー設定については、`metacity.schemas` スキーマ定義ファイルを参照してください。

キーボードのアクセシビリティ設定

キーボードのアクセシビリティ設定を行うには、`/desktop/gnome/accessibility/keyboard` の場所で設定キーの値を変更します。たとえば、キーボードのアクセシビリティ機能が有効になるように必須値を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct --config-source \  
xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.mandatory --type bool \  
--set /desktop/gnome/accessibility/keyboard/enable true
```

この設定のデフォルト値を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct --config-source \  
xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.defaults --type bool \  
--set /desktop/gnome/accessibility/keyboard/enable false
```

キーボードのアクセシビリティのその他の設定を行うこともできます。その他のキーボードのアクセシビリティ設定については、`desktop_gnome_accessibility_keyboard.schemas` スキーマ定義ファイルを参照してください。

キーボードショートカット設定

キーボードショートカット設定を行うには、`/apps/metacity/global_keybindings` の場所で設定キーの値を変更します。たとえば、「アプリケーションの実行」ダイアログボックスを開くために **Alt + F3** のキーボードショートカットのみをユーザーに使用させるとします。この必須値を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct --config-source \  
xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.mandatory --type string \  
--set /apps/metacity/global_keybindings/panel_run_dialog '<Alt>F3'
```

キーボードショートカットのその他の設定を行うこともできます。その他のキーボードショートカット設定については、`metacity.schemas` スキーマ定義ファイルを参照してください。

パネルおよびパネルオブジェクト設定の指定

`panel-default-setup.entries` ファイルは、Oracle Solaris デスクトップのパネルについて次の詳細を指定します。

- パネル数
- パネルの種類
- パネルのプロパティ
- パネルの内容

個別のパネルおよびパネルオブジェクトを構成するには、最初に `panel-default-setup.entries` ファイルの構造を理解する必要があります。

個別のパネルおよびパネルオブジェクトの設定を行うには、構成ソースで複数の設定の値を設定する必要があります。パネル設定の値を設定するもっとも簡単な方法は、`--dump` および `--load` オプションを指定して `gconftool-2` コマンドを使用することです。

個別のパネルおよびパネルオブジェクトの構造

`panel-default-setup.entries` ファイルは、パネルを指定するセクション、パネルの内容を含み、スキーマキーの値を指定します。`panel-default-setup.entries` ファイルは、`/etc/gconf/schemas` ディレクトリにあります。

`panel-default-setup.entries` ファイルの構造は次のとおりです。

- Oracle Solaris デスクトップのパネル、アプレット、およびその他のパネルオブジェクトの一般構造を指定するキー。次のキーは、Oracle Solaris デスクトップに表示されるパネル、パネルオブジェクト、アプレットの数を指定します。

- `/apps/panel/default_setup/general/toplevel_id_list`
- `/apps/panel/default_setup/general/object_id_list`
- `/apps/panel/default_setup/general/applet_id_list`

キーはまた、それぞれのパネル、パネルオブジェクト、アプレットに識別子を割り当てます。たとえば、`panel-default-setup.entries` ファイルからの次の例では、Oracle Solaris デスクトップにパネルを 1 つ表示するように指定します。

```
<entry>
  <key>toplevel_id_listkey>toplevel_id_list>
  <schema_key>/schemas/apps/panel/general/toplevel_id_listschema_key>/schemas/apps/panel/
general/toplevel_id_list>
  <value>
    <list type="string">
      <value>
        <string>bottom_panelstring>bottom_panel>
      </value>
    </list>
  </value>
</entry>
```

`panel-default-setup.entries` ファイルでは、識別子 `bottom_panel` でボトムエッジパネルを指定します。

- パネルのプロパティを指定するキー。パネルプロパティのキーの構造は次のとおりです。
`/apps/panel/default_setup/toplevels/panel-name /panel-property-key`
たとえば、キー `/apps/panel/default_setup/toplevels/bottom_panel/size` はボトムパネルのサイズを指定します。
- パネルオブジェクト、パネルオブジェクトのプロパティ、オブジェクトが存在するパネルを指定するキー。たとえば、`panel-default-setup.entries` ファイルからの次の例では、ボトムパネルの左側にメインメニューオブジェクトを指定します。

```
<entrylist base="/apps/panel/default_setup/objects/main_menu">
  <entry>
    <key>
```

```
object_type

</key>
  <schema_key>/schemas/apps/panel/objects/object_type

</schema_key>
  <value>
    <string>menu-object

</string>

>
  </value>
</entry>
<entry>
  <key>

toplevel_id

</key>
  <schema_key>/schemas/apps/panel/objects/toplevel_id

</schema_key>
  <value>
    <string>bottom_panel

</string>  </value>
  </entry>
<entry>
  <key>position

</key>

>
  <schema_key>/schemas/apps/panel/objects/position
```

```
</schema_key>
  <value>
    <int>0</
int>
  </value>
</entry>
<!-- Possibly more entry elements -->
</entrylist>
```

- アプレット、アプレット設定、アプレットが存在するパネルを指定するキー。たとえば、panel-default-setup.entries からの次の例では、ボトムパネルにウィンドウリストアプレットを指定します。

```
<entrylist base="/apps/panel/default_setup/applets/window_list">
  <entry>
    <key>object_type

</key>
    <schema_key>/schemas/apps/panel/objects/object_type

</schema_key>
    <value>
      <string>bonobo-applet

</string>
    </value>
  </entry>
  <entry>
    <key>toplevel_id

</key>
    <schema_key>/schemas/apps/panel/objects/toplevel_id

</schema_key>
    <value>
      <string>bottom_panel
```

```
</string>
  </value>
</entry>
<entry>
  <key>position</
key>

  <schema_key>/schemas/apps/panel/objects/position

</schema_key>
  <value>
    <int>2</
int>

    </value>
  </entry>
  <!-- Possibly more entry elements -->
  <entry>
    <key>bonobo_iid

</key>
  <schema_key>/schemas/apps/panel/objects/bonobo_iid_type

</schema_key>
  <value>
    <string>OAFIID:GNOME_WindowListApplet

</string>
  </value>
</entry>
</entrylist>
```

OAFIID はアプレットの一意識別子です。特定のアプレットの OAFIID を検索するには、`/usr/lib/bonobo/servers` ディレクトリでそのアプレットの `.server` ファイルを参照します。たとえば、`GNOME_Wncklet_Factory.server` からの次の抜粋では、ウィンドウリストアプレットの OAFIID を示します。

```
<oaf_server iid="OAFIID:GNOME_WindowListApplet"
type="factory" location="OAFIID:GNOME_Wncklet_Factory">
```

▼ 個々のパネルおよびパネルオブジェクトの設定を行う方法

1. ユーザーアカウントでログインします。
2. `--dump` オプションを `gconftool-2` コマンドで使用して、パネル構成の XML 記述が含まれるファイルを生成します。

`--dump` オプションは、指定された GConf リポジトリディレクトリ内のすべての設定キーが含まれるリストを生成します。たとえば、次のコマンドは `my-panel-setup.entries` ファイルにデフォルトパネル構成の XML 記述を作成します。

```
# gconftool-2 --dump /apps/panel > my-panel-setup.entries
```

3. `my-panel-setup.entries` ファイルをテキストエディタで開き、必要に応じてファイルを変更します。

たとえば、デスクトップエントリファイルの場所を変更するとします。次の例は、`--dump` オプションで生成されたファイルからの抜粋です。

```
<entry>
  <key>objects/object_16/launcher_location</key>
  <schema_key>schemas/apps/panel/objects/launcher_location</schema_key>
  <value>
    <string>hadjaha-00adce02f7.desktop</string>
  </value>
</entry>
```

この例では、`hadjaha-00adce02f7.desktop` に対する参照を、グローバルに使用できる別のデスクトップエントリファイルに変更できます。

4. パネルオブジェクトの位置を絶対位置から相対位置に変更します。
- `--dump` オプションでパネル構成を生成した場合、パネルオブジェクトの位置は絶対位置です。パネルオブジェクトの位置を絶対位置から相対位置に変更できます。パネルでもっとも左側に

あるオブジェクトは、`position` の値が `0` です。その次のオブジェクトは、`position` の値が `1` というようになります

オブジェクトの位置をパネルの右側からの相対にする場合は、`panel_right_stick` キーの値を `true` に設定します。たとえば、次の抜粋ではパネルのもっとも右側から 2 番目に使用できる場所に「デスクトップの表示」ボタンを配置します。

```
<entry>
  <key>applets/show_desktop_button/panel_right_stick</key>
  <schema_key>/schemas/apps/panel/objects/panel_right_stick</schema_key>
  <value>
    <bool>true</bool>
  </value>
</entry>
<entry>
  <key>applets/show_desktop_button/position</key>
  <schema_key>/schemas/apps/panel/objects/position</schema_key>
  <value>
    <int>1</int>
  </value>
</entry>
```

5. `--load` オプションを `gconftool-2` コマンドで使用して、デフォルト構成ソースの値を `my-panel-setup.entries` ファイル内の値に設定します。

たとえば、次のコマンドはデフォルト構成ソースのキーの値を `my-panel-setup.entries` 内の対応するキーの値に設定します。

```
# gconftool-2 --direct \
--config-source xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.defaults \
--load my-panel-setup.entries
```

見た目と使い心地の設定

以降のセクションでは、必須またはデフォルト値を見たと使い心地の設定に割り当てる方法について説明します。

フォント設定

フォント設定を行うには、2 つの設定キーの値を変更します。次の表に、変更するキー、およびキーが対応するユーザーインターフェースの部分を示します。

GConf の場所	ユーザーインターフェースコンポーネント
/desktop/gnome/interface/font_name	「フォント」設定ツールの「アプリケーション用フォント」オプション
/desktop/gnome/interface/document_font_name	「フォント」設定ツールの「ドキュメントのフォント」オプション
/desktop/gnome/interface/monospace_font_name	「フォント」設定ツールの「固定幅のフォント」オプション
/apps/metacity/general/titlebar_font	「フォント」設定ツールの「ウィンドウ・タイトルのフォント」オプション
/apps/nautilus/preferences/desktop_font	「フォント」設定ツールの「デスクトップのフォント」オプション

たとえば、Sans 12 を必須のアプリケーション用フォントとして設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct --config-source \
xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.defaults \
--load my-panel-setup.entries
```

palatino 12 をデフォルトのデスクトップオブジェクト用フォントとして設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct --config-source \
xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.defaults --type string \
--set /apps/nautilus/preferences/desktop_font "palatino 12"
```

背景設定

デスクトップの背景の設定を行うには、/desktop/gnome/background の場所で設定キーの値を変更します。たとえば、背景の必須イメージを設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct --config-source \
xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.mandatory --type string --set \
/desktop/gnome/background/picture_filename filename.png
```

この設定のデフォルト値を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct --config-source \
xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.defaults --type string \
--set /desktop/gnome/background/picture_filename filename.png
```

背景のその他の設定を行うこともできます。その他の背景設定については、desktop_gnome_background.schemas スキーマ定義ファイルを参照してください。

スプラッシュイメージ設定

スプラッシュイメージ設定を行うには、`/apps/gnome-session/options/` の場所で設定キーの値を変更します。たとえば、ユーザーにスプラッシュイメージが表示されないようにするには、必須値を次のように設定します。

```
# gconftool-2 --direct --config-source \  
xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.mandatory --type bool \  
--set /apps/gnome-session/options/show_splash_screen false
```

この設定のデフォルト値を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct --config-source \  
xml:readwrite:/etc/gconf/gconf.xml.defaults --type bool \  
--set /apps/gnome-session/options/show_splash_screen false
```

スプラッシュイメージのその他の設定を行うこともできます。その他のスプラッシュイメージ設定については、`gnome-session.schemas` スキーマ定義ファイルを参照してください。

デフォルト設定値の復元

ユーザーのデフォルト設定値を復元するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --direct --config-source \  
user-configuration-source --recursive-unset
```

`user-configuration-source` を、ユーザーのホームディレクトリにある `.gconf` ディレクトリ内の構成ソースに置き換えます。例:

```
# gconftool-2 --direct \  
--config-source xml:readwrite:${HOME}/.gconf --recursive-unset
```

このコマンドは、すべてのサブディレクトリ内にあるすべての設定キーの値をユーザー設定からデフォルト構成ソースファイル内の設定にリセットします。

◆◆◆ 第 3 章

メニューのカスタマイズ

この章では、Oracle Solaris デスクトップのメニューをカスタマイズおよび編集する方法について説明します。メニュー定義ファイル、ディレクトリエントリファイル、およびデスクトップエントリファイルを使用する方法についても説明します。

この章には次の情報が含まれます。

- 33 ページの「メニューの概要」
- 34 ページの「メニュー定義ファイルの操作」
- 36 ページの「ディレクトリエントリファイルの操作」
- 37 ページの「デスクトップエントリファイルの操作」
- 39 ページの「メニューの編集」
- 43 ページの「メニューのマージ」

メニューの概要

Oracle Solaris デスクトップでは、[XDG メニュー仕様](#)に従ってメニューを実装します。この仕様をサポートすることで、Oracle Solaris デスクトップでは次のことが可能です。

- メニュー階層を容易にカスタマイズします。
メニュー階層をカスタマイズするには、少数のファイルのみを編集する必要があります。アプリケーションを変更したりファイルを移動したりする必要はありません。
- アプリケーションを簡単にインストールします。
アプリケーションをインストールするときに、メニュー階層に関する情報をアプリケーションに提供する必要はありません。
- ユーザーがメニューを変更できないようにメニューを構成します。

Oracle Solaris デスクトップのメニューでは、次のファイルコンポーネントを使用します。

- メニュー定義ファイル
- デスクトップエントリファイル
- ディレクトリエントリファイル

メニュー定義ファイルの操作

メニューファイルは、Oracle Solaris デスクトップのメニューバーで使用されるメニューの階層を定義します。これらのファイルを変更することで、変更する `applications.menu` ファイルの場所に応じてすべてのユーザーまたは単一ユーザーのメニューをカスタマイズできます。

メニューファイルは `$XDG_CONFIG_DIRS/menus/applications.menu` ディレクトリに置く必要があります。メニューファイルを操作するには、[XDG ベースディレクトリ仕様](#)で定義されている `$XDG_CONFIG_DIRS` 環境変数を設定する必要があります。

`applications.menu` ファイルの場所を解決するため、デフォルトのパスが次の順序で検索されます。

1. `$XDG_CONFIG_HOME` パス内の各ディレクトリで `menus/applications.menu` ファイルを検索します。`$XDG_CONFIG_HOME` 環境変数が設定されていない場合のデフォルトは `~/.config/` ディレクトリです。
2. `$XDG_CONFIG_DIRS` パス内の各ディレクトリで `menus/applications.menu` ファイルを検索します。`$XDG_CONFIG_DIRS` 環境変数が設定されていない場合の検索のデフォルトは `/etc/xdg/` ディレクトリです。
3. 見つかった最初の `applications.menu` ファイルを使用します。

次の例では、サンプルの `.menu` ファイルを示します。

例 3-1 .menu ファイルの例

```
<!DOCTYPE Menu PUBLIC "-//freedesktop//DTD Menu 1.0//EN"
"http://www.freedesktop.org/standards/menu-spec/1.0/menu.dtd">
<Menu>
  <Name>Applications</Name>
  <Directory>Applications.directory</Directory>

  <!-- Read standard .directory and .desktop file locations -->
  <DefaultAppDirs/>
  <DefaultDirectoryDirs/>

  <!-- Accessories submenu -->
```

```

<Menu>
  <Name>Accessories</Name>
  <Directory>Accessories.directory</Directory>
  <Include>
    <And>
      <Category>Utility</Category>
    <Not>

<Category>System</Category>
  </Not>
  </And>
  </Include>
</Menu> <!-- End Accessories -->

<!-- possibly more submenus -->

</Menu> <!-- End Applications -->

```

この例では、最上位のメニューは Applications という名前で、<Name> 要素を使用して指定されます。Applications メニューには、1 つのサブメニューが含まれていますが、複数のサブメニューを使用できます。各サブメニューには、マッチングルールを使用して一連の使用可能なデスクトップエントリにフィルタを実行するための <Include> 要素もあります。

たとえば、<Category> 要素は、Categories キーに <Category>要素の内容が含まれている場合に限りデスクトップエントリファイルを選択する基本的なマッチングルールです。例では、Categories キーでメニューに「Utility」という語が含まれていて「System」という語が含まれていない場合に限り、Accessories メニューがデスクトップエントリを含みます。Categories キーの詳細は、[37 ページの「デスクトップエントリファイルの操作」](#)を参照してください。

次の表では、.menu ファイルの要素の一部について説明します。

表 3-1 メニュー定義ファイルの要素

要素	説明
Menu	入れ子の <Menu> 要素が含まれている可能性のあるルート要素。入れ子の要素は、サブメニューを定義します。これらの要素を入れ子にする方法によって、メニュー構造が決まります。
Name	メニューの名前を指定します。各 <Menu> 要素は、<Name> 要素を含む必要があります。
Directory	メニューの名前、コメント、アイコンを指定するディレクトリエントリファイルの名前を指定します。この要素が指定されていない場合、メニュー名を表示するために <Name> 要素が使用される必要があります。 デフォルトでは、XDG メニュー仕様での定義どおり \$XDG_DATA_DIRS/desktop-directories/ ディレクトリで .directory ファイルが検索されます。

要素	説明
DefaultAppDirs	\$XDG_DATA_DIRS/applications/ ディレクトリからの使用可能なすべてのデスクトップエントリをスキャンするべきであることを示す命令。この命令が含まれていない場合、これらの場所でデスクトップエントリはスキャンされません。
DefaultDirectoryDirs	\$XDG_DATA_DIRS/desktop-directories/ ディレクトリからの使用可能なすべてのディレクトリエントリをスキャンするべきであることを示す命令。この命令が含まれていない場合、これらの場所でディレクトリエントリはスキャンされません。
Include	メニューの内容の生成に使用されるマッチングルールのリストが含まれます。<Filename>、<Category>、<And>、<Or>、<Not>、または <All> マッチングルールが含まれる可能性があります。
Exclude	<Include> 要素の反対。デスクトップエントリがこの要素に一致する場合、そのエントリは前の含まれる要素のセットから除外されます。このような理由から、この要素は <Include> 要素のあとに出現する必要があります。
Filename	Desktop File-Id が <Filename> 要素の内容と一致するときにデスクトップエントリを選択するマッチングルール。
Category	Categories キーが <Category> 要素の内容と一致するときにデスクトップエントリを選択するマッチングルール。
And	エントリが <And> 要素内のすべての入れ子のマッチングルールで選択されたときにデスクトップエントリを選択するマッチングルール。
Or	エントリが <Or> 要素内の任意の入れ子のマッチングルールで選択されたときにデスクトップエントリを選択するマッチングルール。
Not	エントリが <Not> 要素内の任意の入れ子のマッチングルールで選択されたときにデスクトップエントリを選択しないマッチングルール。
All	すべてのデスクトップエントリを選択するマッチングルール。

.menu ファイルの要素の詳細は、[XDG メニュー仕様](#)を参照してください。

ディレクトリエントリファイルの操作

ディレクトリエントリファイルは、メニューに関する情報を提供するデータファイルです。ディレクトリエントリファイルは、名前、ツールチップ、メニューアイコンなど、メニューの詳細を指定します。ディレクトリエントリファイルは、.directory ファイル拡張子を持ちます。

.directory ファイルの場所を解決するため、デフォルトのパスが次の順序で検索されます。

1. \$XDG_DATA_HOME/desktop-directories を検索します。\$XDG_DATA_HOME 環境変数が設定されていない場合は、~/local/share/desktop-directories デフォルトディレクトリ内を検索します。

2. `$XDG_DATA_DIRS` 内の `desktop-directories` のそれぞれのサブディレクトリを検索します。`$XDG_DATA_DIRS` 環境変数が設定されていない場合は、`/usr/share/desktop-directories` デフォルトディレクトリ内を検索します。
同じ名前を持つ複数の `.directory` ファイルが見つかった場合は、最初に見つかったファイルが優先されます。

次の例では、サンプルのディレクトリエントリファイルを示します。

```
[Desktop Entry]
Name=Graphics
Name[fr]=Graphisme
...
Comment=Graphics applications
Comment[fr]=Applications graphiques
...
Icon=gnome-graphics
Type=Directory
Encoding=UTF-8
```

次の表では、ディレクトリエントリファイルの重要なキーの一部について説明します。

表 3-2 ディレクトリエントリキー

ディレクトリエントリキー	説明
Name	メニューの名前を指定します。この名前がメニューに表示されます。
Comment	メニューの短い説明を指定します。コメントは、メニューをポイントしたときにツールチップとして表示されます。
Icon	メニューを表すアイコンのファイル名を指定します。ファイル名へのパスまたはファイル拡張子は指定しません。
Type	メニューの種類を指定します。このキーの値は、常に <code>Directory</code> です。

デスクトップエントリファイルの操作

デスクトップエントリファイルは、メニュー内の項目に関する情報を提供するデータファイルです。デスクトップエントリファイルは、名前、実行するコマンド、アイコンなど、項目の詳細を指定します。デスクトップエントリファイルには、メニュー階層内の項目の位置を指定するキーワードも含まれます。デスクトップエントリファイルは、`$XDG_DATA_DIRS/applications` ディレクトリに置く必要があり、`.desktop` ファイル拡張子を持つ必要があります。

`.desktop` ファイルの場所を解決するためにデフォルトのパスを検索する順序は、次のとおりです。

1. \$XDG_DATA_HOME/applications ディレクトリ内を検索します。\$XDG_DATA_HOME 環境変数が設定されていない場合は、~/.local/share/applications デフォルトディレクトリ内を検索します。
2. \$XDG_DATA_DIRS にある各ディレクトリの applications サブディレクトリを検索します。\$XDG_DATA_DIRS 環境変数が設定されていない場合は、/usr/share/applications デフォルトディレクトリ内を検索します。
同じ名前を持つ複数の .desktop ファイルが見つかった場合は、最初に見つかったファイルが優先されます。

次の例では、サンプルのデスクトップエントリファイルを示します。

```
[Desktop Entry]
Encoding=UTF-8
Name=Calculator
Name[fr]=Calculatrice
...
Comment=Perform calculations
Comment[fr]=Effectue des calculs compliq

ue
...
Exec=gcalctool
Icon=accessories-calculator
Terminal=false
Type=Application
StartupNotify=true
Categories=GNOME;GTK;Utility;Calculator
```

次の表では、デスクトップエントリファイルの重要なキーの一部について説明します。デスクトップエントリファイルの詳細は、[XDG デスクトップエントリ仕様](#)を参照してください。

表 3-3 デスクトップエントリキー

デスクトップエントリキー	説明
Categories	項目を説明するキーワードを指定します。キーワードはセミコロン (;) で区切ります。 標準のカテゴリキーワードのリストについては、 http://www.freedesktop.org/Standards/menu-spec でデスクトップメニュー仕様を参照してください。 マッチングルールと Categories キーを使用してデスクトップエントリをメニューにマップする方法については、 34 ページの「メニュー定義ファイルの操作」 を参照してください。
Comment	項目の短い説明を指定します。コメントは、メニュー内の項目をポイントしたときにツールチップとして表示されます。
Encoding	デスクトップエントリファイルのエンコーディングを指定します。

デスクトップエントリキー	説明
Exec	メニューから項目を選択したときに実行するコマンドを指定します。
Icon	項目を表すアイコンのファイル名を指定します。ファイル名へのパスまたはファイル拡張子は指定しません。
MimeType	アプリケーションが処理できる MIME タイプを指定します。
Name	項目の名前を指定します。この名前がメニューの項目に表示されます。
NoDisplay	既存アプリケーションをメニューに表示するべきではないことを指定します。
Terminal	Exec キーのコマンドが端末ウィンドウ内で実行されるかどうかを指定します。値が true の場合、コマンドは端末ウィンドウ内で実行されます。 実行するためのウィンドウをコマンドが開かない場合は、このキーの値を true に設定する必要があります。
Type	項目の種類を指定します。Type キーの値は次のいずれかです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Application: アプリケーションを起動する項目。 ■ Link: ファイルやフォルダ、またはリモートリソース (FTP サイトや Web ページなど) にリンクする項目。 ■ FSDevice: ファイルシステムデバイスである項目。 ■ Directory: ディレクトリである項目。

デスクトップエントリファイルのキーの詳細は、[デスクトップエントリ仕様](#)を参照してください。

注記 - パネルランチャーおよびデスクトップオブジェクトもデスクトップエントリファイルを使用します。ランチャーおよびデスクトップオブジェクトのデスクトップエントリファイルは、メニュー内の項目の場合と同じ情報を提供します。たとえば、デスクトップエントリファイルは、ユーザーがランチャーまたはオブジェクトを選択したときに実行するコマンドを提供します。

メニューの編集

メニューには、システムメニューとユーザーメニューの 2 種類があります。

システムメニューの追加および変更

システムメニューを手動でカスタマイズするために、メニュー構成ファイルおよびメニューデータファイルを編集できます。

▼ メニューを追加する方法

すべてのユーザーのメニューは次の方法で追加できます。

- ファイルマネージャーを使用
- メニュー構成ファイルおよびメニューデータファイルを変更

このタスクでは、ファイル変更方法について説明します。

1. 追加する項目のディレクトリエントリファイルを作成します。
2. ディレクトリエントリファイルを `$XDG_DATA_DIRS/desktop-directories` ディレクトリに配置します。
ディレクトリエントリファイルの詳細は、[36 ページの「ディレクトリエントリファイルの操作」](#)を参照してください。
3. `$XDG_CONFIG_DIRS/menus/applications.menu` ファイルで、新規メニューの `<Menu>` 要素を追加します。
.menu ファイルの詳細は、[34 ページの「メニュー定義ファイルの操作」](#)を参照してください。
4. `<Menu>` 要素の下に `<Name>` 要素を作成します。
要素の内容にメニューの名前を含めるようにしてください。
5. `<Menu>` 要素の下に `<Directory>` 要素を作成します。
要素の内容にディレクトリエントリファイルの名前を含めるようにしてください。
ユーザーが次回ログインするときに、メニューがメニューバーに表示されるはずですが。

注意事項 `<Include>` 要素内でマッチングルールを指定しなかった場合、またはルールがどのデスクトップエントリとも一致しなかった場合、メニューがメニューバーに表示されない可能性があります。

次の手順 項目をメニューに追加するには、[40 ページの「メニューに項目を追加する方法」](#)を参照してください。

▼ メニューに項目を追加する方法

1. 追加する項目のデスクトップエントリファイルを作成します。

デスクトップエントリファイルの詳細は、[37 ページの「デスクトップエントリファイルの操作」](#)を参照してください。

2. デスクトップエントリファイルを `$XDG_DATA_DIRS/applications` フォルダに配置します。
3. `$XDG_CONFIG_DIRS/menus/applications.menu` ファイルで、<Menu> 要素に段階 1 で作成したデスクトップエントリファイルを選択するマッチングルールを持つ <Include> 要素が含まれていることを確認します。
ユーザーが次回ログインするときに、メニュー項目が割り当てられた場所に表示されます。

▼ メニューのプロパティを編集する方法

1. `$XDG_CONFIG_DIRS/menus/applications.menu` ファイルで、変更するメニューに対応する <Menu> 要素を検索します。
2. <Directory> 要素内のディレクトリエントリのファイル名を書きとめます。
3. このメニューのディレクトリエントリで、内容を変更してメニューのプロパティを変更します。
.directory ファイルの詳細は、[36 ページの「ディレクトリエントリファイルの操作」](#)を参照してください。

▼ メニュー項目を編集する方法

1. `$XDG_DATA_DIRS/applications` ディレクトリでメニュー項目に対応するデスクトップエントリを見つけます。
2. デスクトップエントリを編集して、メニュー項目のプロパティを変更します。
デスクトップエントリファイルの詳細は、[37 ページの「デスクトップエントリファイルの操作」](#)を参照してください。

▼ メニューから項目を削除する方法

1. `$XDG_CONFIG_DIRS/menus/applications.menu` ファイルで、削除するデスクトップエントリを含む <Menu> 要素を検索します。
2. <Menu> 要素で、<Include> 要素の閉じタグのあとに <Exclude> 要素を挿入します。

3. **<Filename> マッチングルールを <Exclude> 要素のサブ要素として挿入して、デスクトップエントリを削除します。**

次回ログインするときに、メニュー項目はメニューに表示されません。

例 3-2 メニューから項目の削除

次の例では、applications.menu ファイルから dasher.desktop メニュー項目のデスクトップエントリを明示的に除外する方法について示します。

```
<!-- ... -->

<Menu>

<Name>Accessibility</Name>
<Directory>Accessibility.directory</Directory>
<Include>
  <And>
    <Category>Accessibility</Category>
    <Not><Category>Settings</Category></Not>
  </And>
</Include>
<Exclude>
  <Filename>dasher.desktop</Filename>
</Exclude>
</Menu>

<!-- ... -->
```

ユーザーメニューの作成および変更

メニューを編集するには、「メインメニュー」設定ツールを使用できます。または、ユーザーメニューファイルを手動で作成したり編集したりすることもできます。詳細は、『[Oracle Solaris 11.2 Desktop User's Guide](#)』を参照してください。

ユーザーのカスタムメニューを手動で作成するには、\$XDG_CONFIG_HOME/menus/applications.menu ファイルが存在する必要があります。\$XDG_CONFIG_HOME 環境変数が設定されていない場合、デフォルトの ~/.config ディレクトリが使用されます。\$XDG_CONFIG_HOME は applications.menu ファイルが検索される最初の場所であるため、\$XDG_CONFIG_HOME 環境変数はその他のすべてのメニューファイルよりも優先します。

ユーザーメニューには、[34 ページの「メニュー定義ファイルの操作」](#)で説明されているすべての要素を含めることができます。許容される要素の完全なリストは、[XDG メニュー仕様](#)を参照してください。

メニューのマージ

デフォルトでは、ユーザーメニュー構成ファイルは同じ名前のシステムメニュー構成ファイルよりも優先します。たとえば、`applications.menu` ファイルがユーザーの `$XDG_CONFIG_HOME/menus` ディレクトリに存在している場合は、そのユーザーの「Applications」メニューを構成するために、そのファイルがシステムの `applications.menu` ファイルに代わって使用されます。この置換により、ユーザーは想定するすべてのメニュー項目にアクセスできないことがあります。この状況を回避するため、その他のメニュー構成ファイルと置換するのではなくマージするべきであることをメニュー構成ファイルで指定できます。このプロセスについては、以降のセクションで説明します。

ユーザーメニューとシステムメニューのマージ

ユーザーが、標準のシステムメニューのほかに、メニュー項目を追加または削除しただけのことがよくあります。これらの変更をサポートするには、ユーザーの `applications.menu` ファイル内で `<MergeFile>` 要素と属性 `type="parent"` を使用してください。

`<MergeFile>` 要素は、メニューをユーザーのメニューファイルの内容とマージできるようにします。要素の `type` 属性を “parent” と指定すると、`<MergeFile>` 要素の内容は無視されます。マージには、`$XDG_CONFIG_DIRS/menus` ディレクトリ内の次の `applications.menu` ファイルが使用されます。

注記 - 以前の仕様には `type` 属性が含まれていなかったため、`<MergeFile>` 要素の内容としてはマージされるメニューファイルの場所のみが必要です。その結果、`type="parent"` の場合でも、`<MergeFile>` の内容で場所が指定されることがあります。

メニューのマージは次のように実行されます。

1. マージされるメニューファイルのルートの `<Menu>` 要素の子は、ベースメニューファイルの `<MergeFile>` 要素に置き換えられます。

注記 - 「マージされるメニューファイル」とは、`$XDG_CONFIG_DIRS/menus` ディレクトリ内の次の `applications.menu` を指します。

2. 名前が同じすべての子 <Menu> 要素は、同じ名前を持つ各 <Menu> 要素のすべての子要素をメニュー要素の最後のオカレンスに追加することで、単一の <Menu> 要素に統合されます。

次の例は、システムメニューファイルを明示的にマージするユーザーメニューファイルを示します。

```
<!DOCTYPE Menu PUBLIC "-//freedesktop//DTD Menu 1.0//EN"
"http://www.freedesktop.org/standards/menu-spec/menu-1.0.dtd">

<Menu>
  <Name>Applications</Name>
  <MergeFile type="parent">/etc/xdg/menus/applications.menu</MergeFile>
  <Menu>
    <Name>Accessibility</Name>
    <Exclude>
      <Filename>dasher.desktop</Filename>
    </Exclude>
  </Menu>
</Menu>
```

◆◆◆ 第 4 章

テーマのインストール

この章では、Oracle Solaris デスクトップで使用可能なテーマおよびテーマ設定について説明します。この章では、テーマ設定のオプションをインストールする方法、およびカスタムオプションを作成する方法についても説明します。

この章には次の情報が含まれます。

- 45 ページの「テーマの概要」
- 46 ページの「テーマのインデックスファイル」
- 47 ページの「コントロールオプションのインストール」
- 47 ページの「ウィンドウ境界オプションのインストール」
- 48 ページの「アイコンオプションのインストール」
- 48 ページの「テーマ用アイコンのインストール」
- 50 ページの「カスタムコントロールオプションの作成」

テーマの概要

テーマとは、Oracle Solaris デスクトップの一部分の視覚的外観を指定するように調整された設定のグループです。ユーザーは、テーマを選択してデスクトップの外観を変更できます。

テーマには、Oracle Solaris デスクトップのさまざまな部分に影響する設定が含まれます。設定について、次の表で説明します。

設定	説明
コントロール	テーマのコントロール設定は、ウィンドウ、パネル、パネルアプリケーションの視覚的外観を決定します。コントロール設定は、ウィンドウ、パネル、およびパネルアプリケーションに表示される GNOME 準拠インタフェース項目 (メニュー、アイコン、ボタンなど) の視覚的外観も決

設定	説明
	定めます。使用可能なコントロール設定オプションの一部は、特別なアクセシビリティ要件のために設計されています。「テーマ」設定ツールの「コントロール」タブセクションからコントロール設定のオプションを選択できます。
ウィンドウ境界	テーマのウィンドウ境界設定は、ウィンドウ周囲のみの外観を決定します。「テーマ」設定ツールの「ウィンドウの境界」タブセクションからウィンドウ境界設定のオプションを選択できます。
アイコン	テーマのアイコン設定は、パネルおよびデスクトップ背景上のアイコンの外観を決定します。「テーマ」設定ツールの「アイコン」タブセクションからアイコン設定のオプションを選択できます。

テーマのインデックスファイル

各テーマには、テーマの特性を定義するインデックスファイルがあります。インデックスファイルの名前は `/usr/share/themes/theme-name/index.theme` です。

次の例では、サンプルのテーマのインデックスファイルを示します。

```
[Desktop Entry]
Type=X-GNOME-Metatheme
Name=High Contrast Large
Name[es]=Alto contraste grande
Comment=Large black-on-white text and icons
Comment[es]=Textos e iconos grandes en negro sobre blanco
Encoding=UTF-8

[X-GNOME-Metatheme]
GtkTheme=HighContrastLargePrint
IconTheme=HighContrast
MetacityTheme=Atlanta
ApplicationFont=sans 18
```

次の表では、テーマのインデックスファイル内のキーについて説明します。

表 4-1 テーマのインデックスファイル内のキー

インデックスファイルのキー	説明
Type	このテーマが複数のテーマオプションの外観 (コントロール、ウィンドウ境界、アイコンなど) を決定することを指定します。
Name	「テーマ」設定ツールに表示されるテーマの名前を指定します。
Comment	「テーマ」設定ツールでテーマの名前の下に表示されるテキストを指定します。

インデックスファイルのキー	説明
GtkTheme	「テーマ」設定ツールのテーマの詳細ダイアログのコントロール設定に対応します。ウィンドウ、パネル、およびパネルアプリケーションに適用されるコントロール設定オプションを指定します。
IconTheme	「テーマ」設定ツールの「テーマの詳細」ダイアログのアイコン設定に対応します。パネルおよびデスクトップ背景に適用されるアイコン設定オプションを指定します。
MetacityTheme	「テーマ」設定ツールの「テーマの詳細」ダイアログのウィンドウ境界設定に対応します。ウィンドウに適用されるウィンドウ境界設定オプションを指定します。
ApplicationFont	「フォント」設定ツールのアプリケーションフォント設定に対応します。

コントロールオプションのインストール

「テーマ」設定ツールのコントロール設定に新規オプションをインストールできます。コントロールオプションは、`/usr/share/themes` ディレクトリ内にあります。

コントロールオプションのオプションファイルは、`/usr/share/themes/option-name/gtk-2.0/gtkrc` にあります。

ファイルシステム内でコントロールオプションの画像ファイルは、`/usr/share/themes/option-name/pixmap/*.*` にあります。

通常、コントロール設定の新規オプションは、`.tar.gz` ファイルとして提供されます。新規コントロールオプションをインストールするには、`.tar.gz` ファイルを解凍し、`.tar` ファイルを `/usr/share/themes` ディレクトリに展開します。

コントロール設定の独自オプションをインストールできます。コントロール設定のオプションをインストールする場合、オプションは `$HOME/.themes` ディレクトリに格納されます。

ウィンドウ境界オプションのインストール

「テーマ」設定ツールのウィンドウ境界設定に新規オプションをインストールできます。ウィンドウ境界オプションは、`/usr/share/themes/option-name/metacity-1` ディレクトリにあります。ファイルシステム内でウィンドウ境界オプションの場所は、次のとおりです。

ウィンドウ境界オプションのオプションファイルは、`/usr/share/themes/option-name/metacity-1/metacity-theme-1.xml` にあります。

ファイルシステム内でコントロールオプションの画像ファイルは、`/usr/share/themes/option-name/metacity-1/*.*` にあります。

通常、ウィンドウ境界設定の新規オプションは、`.tar.gz` ファイルとして提供されます。新規ウィンドウ境界オプションをインストールするには、`.tar.gz` ファイルを解凍し、`.tar` ファイルを `/usr/share/themes` ディレクトリに展開します。

ウィンドウ境界設定の独自オプションをインストールできます。ウィンドウ境界設定のオプションをインストールする場合、オプションは `$HOME/.themes` ディレクトリに格納されます。

アイコンオプションのインストール

アイコン設定の新規オプションを追加できます。アイコンオプションは、`/usr/share/icons/option-name` ディレクトリにあります。

アイコンオプションのオプションファイルは、`/usr/share/icons/option-name` にあります。

アイコンオプションの画像ファイルは、`/usr/share/icons/option-name/icons/*.*` にあります。

UI カテゴリのディレクトリは、`apps`、`devices`、`emblems`、`filesystems`、または `mimetypes` です。

通常、アイコン設定の新規オプションは、`.tar.gz` ファイルとして提供されます。新規アイコンオプションをインストールするには、`.tar.gz` ファイルを解凍し、`.tar` ファイルを `/usr/share/icons` ディレクトリに展開します。

アイコン設定の独自オプションをインストールできます。アイコン設定のオプションをインストールする場合、オプションは `$HOME/.icons/option-name` ディレクトリに格納されます。

テーマ用アイコンのインストール

アプリケーションの新規アイコンをインストールするときは、テーマでアイコンが正しく表示されるようにアイコンを複数バージョン作成する必要があります。

次の種類のアイコンについて、複数バージョンを作成する必要があります。

- Oracle Solaris デスクトップでアプリケーション内で使用されるアイコン
- GTK+ アプリケーションで内部的に使用されるアイコン (GTK+ ストックアイコン)

アイコンは、Portable Network Graphic (PNG) 形式など、複数の形式で作成できます。デスクトップ環境で推奨されるアイコンサイズは 48 × 48 ピクセルです。このサイズであれば、ほとんどのテーマでアイコンを拡大縮小し直すことができます。

新規アイコンをインストールするときは、48 × 48 ピクセルで次のバージョンのアイコンを作成します。

- 標準アイコン
- 高コントラストアイコン
- 反転表示の高コントラストアイコン

可能であれば、大きな出力を必要としないテーマ用に、示されているアイコンのそれぞれについて 16 × 16 ピクセルバージョンも作成するようにしてください。

Oracle Solaris デスクトップには、特別な視覚的要件を持つユーザー向けに設計されたテーマが複数用意されています。たとえば、一部のテーマは弱視のユーザー向けに設計されています。

アプリケーションランチャー用およびパネル用のアイコンを作成する方法の詳細は、<http://www.freedesktop.org/Standards/icon-theme-spec> を参照してください。

▼ テーマ用アイコンをインストールする方法

1. [47 ページの「コントロールオプションのインストール」](#)または [47 ページの「ウィンドウ境界オプションのインストール」](#)でテーマ用に指定された画像ファイルの場所に、アイコンをインストールします。

たとえば、アイコンを HighContrastLargePrint テーマに追加するには、アイコンを `/usr/share/themes/HighContrastLargePrint/pixmaps` ディレクトリに追加します。

2. アイコンへの参照を関連テーマファイルに追加します。

たとえば、アイコンを HighContrastLargePrint テーマに追加するには、アイコンへの参照を `/usr/share/themes/HighContrastLargePrint/gtk-2.0/gtkrc` ファイルに追加します。

3. テーマ用の `gtkrc` ファイルを変更して、アイコンを GTK+ ストックアイコン識別子と関連付けます。

カスタムコントロールオプションの作成

コントロール設定のオプションが適切でない場合は、カスタムコントロールオプションを作成できます。

▼ カスタムコントロールオプションを作成する方法

1. オプションのディレクトリ構造を `/usr/share/themes` ディレクトリに作成します。
ほかのオプションが使用する同じディレクトリ構造を使用します。
たとえば、`SmallPrint` という名前のオプションを作成するには、次のディレクトリを作成します。
 - `/usr/share/themes/SmallPrint`
 - `/usr/share/themes/SmallPrint/gtk-2.0`
2. 要件に適しているもっとも近い `gtkrc` ファイルを特定します。
3. ファイルを新規オプションの `gtk-2.0` ディレクトリにコピーします。
4. 必要に応じて、`gtkrc` ファイルでインタフェース要素の属性を変更します。
5. 新規オプションに画像が含まれる場合、新規オプションの `pixmap` ディレクトリ内に新規オプション用の画像をインストールします。

注記 - 新規オプションで別のオプションからの画像のみを使用する場合は、新規オプション用にその画像のコピーを作成する必要はありません。`gtkrc` ファイルの `pixmap_path` エントリで、画像への参照が正しいことを確認してください。

これで、ユーザーがコントロール設定用の新規オプションを選択できます。

◆◆◆ 第 5 章

フォントのカスタマイズ

Oracle Solaris デスクトップのアプリケーションは、次のフォントシステムのいずれかを使用して、画面および出力でテキストを描画するためのフォントを検索および使用します。

- fontconfig ライブラリ
- レガシー X11 フォントシステム

各アプリケーションは、これらのいずれかのシステムを使用するように設計されています。Oracle Solaris デスクトップで両方のシステムをサポートしたり切り替えたりするアプリケーションはわずかです。

この章では、Oracle Solaris デスクトップで使用できるフォントシステムの詳細を説明します。また、Oracle Solaris デスクトップでフォントをカスタマイズする方法についても説明します。この章には次の情報が含まれます。

- [51 ページの「フォントの概要」](#)
- [55 ページの「フォントの置換」](#)

フォントの概要

このセクションでは、fontconfig ライブラリと、フォントをライブラリに追加する方法について説明します。また、レガシー X11 フォントシステムと、これを使用してビットマップフォントを追加する方法についても説明します。

fontconfig ライブラリ

Oracle Solaris デスクトップは、fontconfig 構成およびカスタマイズライブラリを使用します。fontconfig ライブラリは、PostScript Type 1 フォントや TrueType フォントを含むすべての種類のフォントを使用できます。

Oracle Solaris デスクトップの多くのアプリケーション (GNOME デスクトップ環境に含まれるアプリケーションを含む) は、フォントを検索するために fontconfig システムを使用します。fontconfig ライブラリは、Oracle Solaris デスクトップで使用できるすべてのフォントのリストを提供します。このリストを編集するため、fontconfig は /etc/fonts/fonts.conf ファイルに一覧表示されたディレクトリを検索します。

fontconfig ライブラリによってアクセスされるようにフォントをインストールすることは簡単で、\$HOME/.fonts サブディレクトリにフォントをコピーするだけです。このライブラリ経由でアクセスされるフォントは、DejaVu Sans や Liberation Mono のような単純な名前です。

fc-list コマンドは、このライブラリで認識されているすべてのフォントのリストを提供します。fonts.conf (4) のマニュアルページで説明されているパターンを使用すると、特定のサイズやスタイルを指定できます。たとえば、DejaVu Mono フォントの太字版の 12 ポイントサイズを使用して xterm を起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ xterm -fa "DejaVu Mono-12:style=Bold"
```

fontconfig ライブラリの詳細は、<http://freedesktop.org/software/fontconfig> を参照してください。

フォント構成の調整については、「[Adjusting Font Configuration](#)」 in 『[International Language Environments Guide for Oracle Solaris 11.2](#)』を参照してください。

フォントの追加

このセクションでは、すべてのユーザーまたは個々のユーザーに対してフォントを追加する方法について説明します。

▼ すべてのユーザーに対してフォントを追加する方法

1. フォントファイルを `/etc/fonts/fonts.conf` ファイル内のいずれかのディレクトリにコピーします。

通常、フォントは `/usr/share/fonts/` ディレクトリに格納されます。fontconfig ライブラリは、フォントのリストを自動的に更新します。

2. フォントのリストが更新されない場合は、次のコマンドを入力します。

```
# fc-cache directory-name
```

▼ 個々のユーザーに対してフォントを追加する方法

1. フォントファイルをユーザーの `$HOME/.fonts` ディレクトリにコピーします。

fontconfig ライブラリは、フォントのリストを自動的に更新します。

2. フォントのリストが更新されない場合は、次のコマンドを入力します。

```
# fc-cache directory-name
```

レガシー X11 フォントシステム

一部のアプリケーションでは、現在でも元の X Window System フォントメカニズムを使用しています。これらのスタイルの選択肢は少なく、フォントの名付けスキームは複雑で、アンチエイリアス処理や LCD 用のフォント平滑化は含まれていません。X11 フォント名付けスキームの詳細は、[X Logical Font Description の仕様](#)を参照してください。X11 フォントコマンドの一部には次が含まれます。

- `xlsfonts` – システムが認識しているすべてのフォントのリストを提供します
- `xfontsel` – システムが認識しているフォントのシンプルなフォント選択アプリケーションを提供します

X Logical Font Description (XLFD) 名のフィールドを使用して、特定のスタイルとサイズを指定できます。たとえば、DejaVu Mono フォントの太字版の 12 ポイントサイズを使用して `xterm` を起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ xterm -fn '-misc-dejavu sans mono-bold-r-normal--12-120-72-72-m*-iso10646-1'
```

レガシー X11 フォントシステムを使用してフォントをインストールするには、`mkfontdir` または `mkfontscale` コマンドでメタデータファイルを作成し、`xset` コマンドでディレクトリを X サーバーフォントパスに追加する必要があります。`xset` コマンドで変更されたフォントパスは、新規セッションのたびにデフォルト設定にリセットされます。

注記 - フォントパスは、フォントディレクトリへのリンクを `/etc/X11/fontpath.d` ファイルに追加することで、すべてのセッション用のデフォルトの X11 フォントパスに永続的に追加できます。詳細は、Xorg(1) のマニュアルページの `FONTS` および `FONTPATH.D` セクションを参照してください。

`/etc/X11/fontpath.d` ディレクトリは Oracle Solaris OS のデフォルトの `fonts.conf` ファイルに含まれているため、この方法で追加されるフォントは、`fontconfig` ライブラリを使用することでアプリケーションで自動的に使用できます。

レガシー X11 フォントシステムおよびビットマップフォントや拡大縮小可能なフォントのインストールについて詳細は、<http://www.x.org/releases/X11R7.6/doc/xorg-docs/fonts/fonts.html> を参照してください。

▼ レガシー X11 フォントシステムを使用してビットマップフォントをインストールする方法

フォントをインストールするときは、最初に、すべての関連フォントファイルといくつかのインデックスファイルを含むフォントディレクトリを作成する必要があります。次に、この新しいディレクトリをフォントパスに含めることで、ディレクトリの存在を X サーバーに通知する必要があります。

1. (オプション) BDF 形式のフォントファイルを PCF 形式に変換します。

ビットマップフォントは、通常は BDF 形式で配布されますが、バイナリの PCF 形式のほうがより効率的です。

a. `bftopcf` コマンドを使用して、BDF 形式ファイルを変換します。

たとえば、`courier12.bdf` ファイルを変換するには、次のように入力します。

```
$ bftopcf courier12.bdf
```

b. 得られた PCF 形式ファイルを圧縮します。

例:

```
$ gzip courier12.pcf
```

2. 使用可能にするすべてのフォントファイルをディレクトリにコピーします。

たとえば、`/usr/local/share/fonts/bitmap/` ディレクトリを使用するには:

```
$ mkdir /usr/local/share/fonts/bitmap/  
$ cp *.pcf.gz /usr/local/share/fonts/bitmap/
```

3. `fonts.dir` インデックスファイルを作成します。

```
$ mkfontdir /usr/local/share/fonts/bitmap/
```

4. フォントパスを設定して、X サーバーが新しいフォントディレクトリを認識できるようにします。

- 現在のセッションのみにフォントパスを設定するには、`fp` オプションを使用します。

オプションの前にプラス記号 (+) を付けると、ディレクトリがフォントパスの先頭に追加されます。オプションのあとに付けると、ディレクトリがフォントパスの末尾に追加されます。

例:

```
$ xset +fp /usr/local/fonts/Type1  
$ xset fp+ /usr/local/fonts/bitmap
```

詳細は、[xset](#) のマニュアルページを参照してください。

- フォントパスを永続的に設定するには、X サーバーの `xorg.conf` ファイルで指定します。

パスは、ファイルの `Files` セクションの `FontPath` エントリで示されているすべてのディレクトリを出現順に追加して計算されます

例:

```
FontPath "/usr/local/fonts/Type1"  
...  
FontPath "/usr/local/fonts/bitmap"
```

詳細は、[xorg.conf](#) のマニュアルページを参照してください。

フォントの置換

`fontconfig` ライブラリは、すべてのフォントまたは個々の文字が存在しない場合にフォントの置換を実行します。使用可能でないフォントをシステムで表示する必要がある場合、`fontconfig` は類似フォントを表示しようとします。たとえば、Web ページで Verdana フォントの表示をリクエストしていて、そのフォントがシステムにインストールされていない場

合、`fontconfig` は Helvetica などの類似フォントを表示します。類似フォントのリストは、`/etc/fonts/fonts.conf` ファイルで定義されます。

選択されたフォントに存在しない文字をシステムで表示する必要がある場合、`fontconfig` はその文字を類似フォントで表示しようとします。たとえば、Bitstream Vera Sans をテキストエディタアプリケーションのフォントとして選択するとします。Bitstream Vera フォントファミリーにはキリル文字が含まれません。キリル文字を含むドキュメントを開いた場合、テキストエディタはキリル文字を含む類似フォントを使用してその文字を表示します。

`fontconfig` ライブラリは、フォントの別名 (`serif`、`sans-serif`、`monospace` など) も定義します。フォントのいずれかの別名を選択すると、システムは `/etc/fonts/fonts.conf` ファイルでその別名に定義されている最初のフォントを使用しようとします。

MIME タイプの使用

この章では、MIME システムの概要について、およびアプリケーションが MIME タイプを検出する方法、MIME タイプを登録する方法、およびアプリケーションをデスクトップに追加する方法について説明します。この章では、MIME データベースのさまざまな部分を構成する方法についても説明します。

この章には次の情報が含まれます。

- 57 ページの「MIME タイプの概要」
- 58 ページの「MIME データベースについて」
- 62 ページの「MIME タイプ XML ファイルの理解」
- 64 ページの「MIME タイプの変更」
- 67 ページの「アプリケーションの MIME タイプの登録」

MIME タイプの詳細は、[XDG 共有 MIME 情報仕様](#)を参照してください。

MIME タイプの概要

Multipurpose Internet Mail Extension (MIME) タイプは、ファイルの形式を識別します。インターネットブラウザや電子メールアプリケーションなどのアプリケーションでは、MIME タイプのファイルを使用してそのファイルで実行するアクションを決定します。

たとえば、ファイルマネージャーは、次のタスクを実行するためにファイルの MIME タイプを認識する必要があります。

- 適切なアプリケーションでファイルを開きます
- ファイルの種類を説明する文字列を表示します
- ファイルを表す適切なアイコンを表示します
- ファイルを開くことができるその他のアプリケーションのリストを表示します

もともと、MIME タイプは、電子メールメッセージのメッセージ本文を識別するための標準として提案されました。多くのシステムでは MIME タイプを使用して、ファイルシステム上の任意のファイルの形式を特定します。

MIME タイプは、最上位のメディアの種類、スラッシュ文字 (/) の区切り、サブタイプ識別子の順で構成されます。image/jpeg は MIME タイプの例です。この例で、メディアの種類は image、サブタイプ識別子は jpeg です。最上位のメディアの種類は、ファイルの内容に関する全般的なカテゴリ分けで、サブタイプ識別子は、ファイルの形式を具体的に識別します。サポートされるメディアの種類と対応するサブタイプの詳細は、IANA Web サイトの [MIME Media Types](#) を参照してください。

Oracle Solaris デスクトップでの MIME タイプの実装は、[XDG 共有 MIME 情報仕様](#)に従っています。この仕様には次の利点があります。

- すべての MIME 関連ファイルにとって標準の場所
- アプリケーションが新しい MIME タイプに関する情報を登録する標準の方法
- ファイルの MIME タイプを取得する標準の方法
- MIME タイプに関する情報を取得する標準の方法

この章の以降のセクションでは、MIME データベースを構成するファイルおよびディレクトリ、ソース XML ファイルの詳細、MIME タイプを作成または変更する方法、特定の MIME タイプのハンドラとしてアプリケーションを登録する方法、およびアプリケーションを Oracle Solaris デスクトップに追加する方法について説明します。

MIME データベースについて

MIME データベースとは、次の情報を含むファイルの集合です。

- 一連の既知の MIME タイプ
- ファイルの MIME タイプを決定する方法
- MIME タイプに関するメタ情報

MIME データベースは、`$XDG_DATA_HOME/mime` および `$XDG_DATA_DIRS/mime` ディレクトリにある一連のファイルから作成されます。環境変数が設定されていない場合、デフォルト値はそれぞれ `~/.local/share` および `/usr/local/share:/usr/share` です。

このガイドでは、これらのディレクトリを総称的に指す場合に、`<MIME>` を使用します。同じ MIME タイプに関して競合する情報が見つかった場合、最初に見つかったファイル内の情報が優先します。

たとえば、環境変数がデフォルトパスであるとする、<MIME>/text/plain.xml ファイルをロードする命令では次のファイルをロードします。

- ~/.local/share/mime/text/plain.xml
- /usr/local/share/mime/text/plain.xml
- /usr/share/mime/text/plain.xml

注記 - XDG 共有 MIME 情報仕様は、X Desktop Group によってドラフト版が作成され、この仕様では XDG ベースディレクトリ仕様が利用されています。

MIME データベースの内容

MIME データベースには、次のディレクトリおよびファイルが含まれます。

- <MIME>/packages/
- <MIME>// media /subtype.xml
- <MIME>/globs
- <MIME>/magic
- <MIME>/XMLnamespaces
- <MIME>/aliases
- <MIME>/subclasses

次に、MIME データベース内の MIME ディレクトリおよびファイルのリスト、および簡単な説明を示します。

- <MIME>/packages/- このディレクトリには、任意の数の XML ファイルを含めることができます。各 XML ファイルは、MIME タイプのコレクションを記述します。<MIME>/packages/ ディレクトリにある freedesktop.org.xml ファイルには、広く使用され認識されているすべてのデフォルト MIME タイプが含まれます。デフォルトで、freedesktop.org.xml ファイルは /usr/share/mime/packages ディレクトリにインストールされます。

新しい MIME タイプに関する情報を提供するアプリケーションは、このディレクトリに新しい XML ファイルを 1 つインストールします。ファイルは、アプリケーションがインストールされる場所のプレフィックスに応じて、/mime/package サブディレクトリ内に作成されます。たとえば、/usr/bin ディレクトリにインストールされるアプリケーションは、新しいソース XML ファイルを /usr/share/mime/packages ディレクトリにインストールするはずで、packages

ディレクトリ内の XML ファイルの詳細は、[62 ページの「MIME タイプ XML ファイルの理解」](#)を参照してください。

- <MIME>/media/subtype.xml- これらのディレクトリおよびファイルは、update-mime-database アプリケーションによって <MIME>/packages/ サブディレクトリ内の一連のソース XML ファイルから自動的に生成されます。たとえば、/usr/share/mime/packages/freedesktop.org.xml ファイル内の各 mime-type 要素について、MIME タイプのメディアの種類でディレクトリが /usr/share/mime/ ディレクトリに作成されます。メディアの種類とともに、そのディレクトリにはその MIME タイプのサブタイプ識別子の XML ファイルも作成されます。作成される XML ファイルの内容には、コメント、翻訳、サブクラスの指定、および別名が含まれます。

次の例は、update-mime-database アプリケーションで freedesktop.org.xml デフォルトソース XML ファイルを使用して生成されるファイルの抜粋です。

```
<?xml version='1.0' encoding='utf-8'?>
<mime-type
xmlns="http://www.freedesktop.org/standards/shared-mime-info"
type="text/plain">
<!--Created automatically by update-mime-database.
DO NOT EDIT!-->
<comment>
plain text document
</comment>
<!-- possibly more translations-->
<comment xml:lang="es">
documento de texto sencillo
</comment>
<comment xml:lang="eu">
testu soileko dokumentua
</comment>
<comment xml:lang="fi">
perustekstiasiakirja
</comment>
<comment xml:lang="fr">
document plein texte
</comment>
<!-- possibly more translations -->
```

</mime-type>

- <MIME>/globs- このファイルの各行には、コロン区切りの MIME タイプおよび glob パターンが含まれます。glob パターンと一致するファイルは、コロンの前に指定されている MIME タイプへと解決されます。ファイル名が glob パターンと一致する方法については、特殊なルールがあります。詳細は、XDG 共有 MIME 仕様を参照してください。

このファイルは、update-mime-database アプリケーションによっても freedesktop.org.xml デフォルトソース XML ファイルを使用して生成されます。

- <MIME>/magic- これは、内容を判別することによって MIME タイプを解決する方法（「マジックルール」と呼ばれる）に関する情報が含まれるバイナリファイルです。マジックルールとは、ファイルの先頭の検索対象のテキストまたはバイナリデータを指定することで、ファイルの MIME タイプを定義する 1 つ以上のルールのセットです。たとえば、ファイル内のバイトオフセット 0 にある %PDF- 文字列をチェックするルールを設定できます。文字列が見つかった場合、ファイルを application/pdf MIME タイプに割り当てることができます。

このファイルは、update-mime-database アプリケーションによっても生成されます。

- <MIME>/XMLnamespaces- このファイルには、XML 名前空間から MIME タイプへのマッピングが含まれます。各行には 3 つのフィールドが含まれます。

- namespace

- localName

- MIME type

各フィールドは空白で区切ります。localName が空の場合、namespace および MIME type フィールドの間に 2 つの空白があります。

このファイルは、update-mime-database アプリケーションによっても生成されます。

- <MIME>/aliases- このファイルには、各 MIME タイプの別名のリストが含まれます。別名とは、MIME タイプのもう一つのタイプです。このファイルの各行には、2 つのフィールドが含まれます。

- alias name

- MIME type

フィールドは空白で区切ります。このファイルは、update-mime-database アプリケーションによっても生成されます。

- <MIME>/subclasses- このファイルには、サブクラスに入れられた MIME タイプのリストとその親 MIME タイプが含まれます。XDG 共有 MIME 仕様によると、あるタイプのすべてのインスタンスが別のタイプのインスタンスでもある場合、最初のタイプは 2 番目のタイプ

のサブクラスです。たとえば、すべての image/svg ファイルは text/xml、text/plain、および application/octet-stream ファイルでもあります。サブクラスとは、データのカテゴリではなく形式に関することです。たとえば、すべての表計算ドキュメントが、汎用の表計算ドキュメントクラスから継承するわけではありません。

このファイルの形式は、aliases ファイルと似ています。各行には 2 つのフィールドが含まれます。

- subclassed MIME type
- parent MIME type

各フィールドは空白で区切ります。このファイルは、update-mime-database アプリケーションによっても生成されます。

MIME データベースのリフレッシュ

新しい MIME タイプをシステムに追加したり、MIME タイプに関する情報を変更したりするには、MIME データベースをリフレッシュする方法を理解する必要があります。MIME データベースをリフレッシュするには、update-mime-database アプリケーションを使用します。たとえば、アプリケーションが新しい MIME タイプに関する情報を /usr/share/mime/packages/diff.xml ファイルにインストールする場合、update-mime-database アプリケーションを /usr/share/mime パラメータとともに呼び出す必要があります。

```
# update-mime-database /usr/share/mime
***
* Updating MIME database in /usr/share/mime...
***
```

MIME データベースをリフレッシュするには、<MIME>/packages ディレクトリ内のすべてのソース XML ファイルをスキャンします。

MIME タイプ XML ファイルの理解

MIME XML ファイルは、update-mime-database アプリケーションによって MIME データベースにインストールされるすべての情報を提供します。MIME XML ファイルは、<MIME>/packages ディレクトリにあります。MIME XML ファイルに関するいくつかのルール:

- XML ファイルでは namespace に <http://www.freedesktop.org/standards/shared-mime-info> を指定する必要があります。

- root 要素は mime-info にする必要があります。
- mime-info 要素の子として 0 個以上の mime-type 要素を指定できます。type 属性は、定義している MIME タイプを指定するために使用されます。

デフォルトでは、freedesktop.org.xml ファイルがいくつかの <MIME> パス内の packages ディレクトリ (通常は /usr/share/mime/packages) にインストールされます。

次の表では、mime-type 要素の子にすることができる各要素の簡単な説明を示します。

表 6-1 <mime-type> の子要素

要素 (および属性)	説明
<glob pattern="*.xyz">	この要素は、ファイル名の glob パターンを指定します。ファイル名が一致する場合、ファイルには親 mime-type 要素の MIME タイプが割り当てられます。 pattern 属性は必須です。
<magic priority="50">	この要素には、match 要素のリストがその子として含まれます。 priority 属性はオプションで、0 - 100 の範囲で優先度を指定します (100 が最高の一致優先度)。各子 match 要素には、3 つの必須属性と 1 つのオプション属性があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ type ■ offset ■ value ■ mask (オプション属性) これらの属性の詳細については、 XDG 共有 MIME 情報仕様 を参照してください。
<alias type="media/ subtype">	この要素は、親 mime-type 要素の別名を定義します。たとえば、application/x-pdf は、application/pdf MIME タイプの別名です。
<sub-class-of type="media/ subtype">	この要素は、親 mime-type 要素を type 属性で指定された MIME タイプのサブクラスとして定義します。たとえば、image/svg は text/xml、text/plain、および application/octet-stream MIME タイプのサブクラスです。
<comment xml:lang="locale">	この要素は、MIME タイプの読み取り可能な説明を提供します。この要素が 0 個以上出現できるのは、それぞれに xml:lang 属性の一意的値が含まれる場合のみです。
<root-XML namespaceURI="namespace" localName="">	ファイルが XML ファイルであると判断されると、この要素が namespaceURI および localName 属性を使用してファイルの種

要素 (および属性)	説明
	類をさらに分類することを補助します。namespaceURI 属性はドキュメントの名前空間であり、localName はドキュメントのルート要素の名前です。localName が存在してもその値が空の場合は、ルート要素が任意の名前を持つ可能性があります、それでも名前空間は一致する必要があります。

次の例では、text/x-diff MIME タイプを定義します。

例 6-1 diff.xml ソース XML ファイルの例:

```
<?xml version='1.0'?>
<mime-info xmlns='http://www.freedesktop.org/standards/shared-mime-info'>
<mime-type type="text/x-diff">
  <comment>Differences between files</comment>
  <comment xml:lang="af">verskille tussen lêers</comment>
  <!-- more translated comment elements -->
  <magic priority="50"> <match type="string" offset="0" value="diff\t"/>
  <match type="string" offset="0" value="***\t"/>
  <match type="string" offset="0" value="Common subdirectories: "/>
</magic>
<glob pattern="*.diff"/>
<glob pattern="*.patch"/>
</mime-type>
</mime-info>
```

この例では、複数の comment 要素で MIME タイプにさまざまな言語の読み取り可能な名前を指定します。text/x-diff MIME タイプには、glob パターンと内容の判別 (「マジックルール」と呼ばれる) の両方を使用したマッチングルールがあります。.diff または .patch 拡張子を持つすべてのファイルがこの MIME タイプへと解決されます。また、match 要素の value 属性で指定された文字列で始まる内容を持つファイルは、text/x-diff MIME タイプへと解決されます。glob パターンとマジックルールの詳細については、[XDG 共有 MIME 情報仕様](#)を参照してください。

MIME タイプの変更

<MIME>/packages ディレクトリ内のアプリケーションによってインストールされているソース XML ファイルは決して直接変更しないでください。代わりに、Overrides.xml ファイルを変更します。このファイルは、同じ packages ディレクトリにインストールされているその他のすべてのソース XML ファイルよりも優先します。アプリケーションの作成者にこのルールは適用されません。

アプリケーションの作成者は、新しいソース XML ファイルを作成し、そのファイルを <MIME>/packages ディレクトリに配置してください。

変更するファイルの場所に応じてシステム上のすべてのユーザーまたは特定のユーザーの MIME データベースを変更できます。すべてのユーザーのデータベースを変更するには、\$XDG_DATA_DIRS/mime/packages ディレクトリ内のファイル Overrides.xml を変更します。1 人のユーザーのデータベースを変更するには、\$XDG_DATA_HOME/mime/packages ディレクトリ内の Overrides.xml ファイルを変更します。

変更したら常に、update-mime-database アプリケーションを、1 番目のパラメータに MIME データベースのディレクトリ場所を指定して実行する必要があります。

▼ MIME タイプを追加または変更する方法

1. MIME タイプの定義を含む Overrides.xml ソース XML ファイルを作成します。
 - すべてのユーザーの定義を設定するには、ファイルを /usr/share/mime/packages ディレクトリに配置します。
 - 個々のユーザーの定義を設定するには、ファイルを ~/.local/share/mime/packages ディレクトリに配置します。

ファイルがすでに存在する場合は、そのファイルを開きます。
2. update-mime-database を実行して MIME データベースを更新します。
 - すべてのユーザーの定義を設定する場合:


```
# update-mime-database /usr/share/mime
```
 - 個々のユーザーの定義を設定する場合:


```
# update-mime-database ~/.local/share/mime/packages
```
3. update-mime-database を実行して MIME データベースを更新します。


```
# update-mime-database /usr/share/mime
```
4. gnomevfs-info コマンドを使用して変更を検証します。

たとえば、`gnomevfs-info` コマンドは、SVG ファイルに対して実行したときに次の出力を表示します。この MIME タイプのデフォルトアプリケーションは `eog.desktop` です。

```
$ gnomevfs-info mime-diagram.svg
Name           : mime-diagram.svg
Type           : Regular
MIME type      : image/svg+xml
Default app    : eog.desktop
Size          : 14869
Blocks        : 32
I/O block size : 4096
Local         : YES
SUID          : NO
SGID         : NO
Sticky        : NO
Permissions   : 600644
Link count    : 1
UID           : 1000
GID           : 100
Access time   : Wed Feb 22 18:24:47 2006
Modification time : Wed Feb 22 18:24:42 2006
Change time   : Wed Feb 22 18:24:42 2006
Device #     : 775
Inode #      : 297252
Readable     : YES
Writable     : YES
Executable   : NO
$
```

デフォルトアプリケーションの詳細については、[67 ページの「アプリケーションの MIME タイプの登録」](#)を参照してください。

例 6-2 application/x-newtype MIME タイプの作成

1. 新しいファイル `test.xyz` をホームディレクトリに作成します。
2. `gnomevfs-info` コマンドを使用して、ファイルの MIME タイプを検索します。

```
$ gnomevfs-info text.xyz
```

このファイルに一致する glob パターンやマジックルールがないため、このファイルの MIME タイプは `text/plain` として検出されるはずですが。

注記 - glob パターンまたはマジックルールがファイルと一致しない場合、ファイルにテキストデータが含まれている場合は `text/plain` MIME タイプへと解決され、バイナリデータの場合は `application/octet-stream` へと解決されます。ファイルが空の場合、タイプは `text/plain` MIME タイプとして識別されます。

3. `Overrides.xml` ファイルを作成するか、このファイルがすでに存在している場合はファイルを変更します。

サンプル XML ファイルは次のとおりです。

```
<?xml version='1.0' encoding='utf-8'?>
<mime-info xmlns="http://www.freedesktop.org/standards/shared-mime-info">
  <mime-type type="application/x-newtype">
    <comment>new mime type</comment>
    <glob pattern="*.xyz"/>
  </mime-type>
</mime-info>
```

4. `update-mime-database` コマンドを使用して、MIME データベースを更新します。

```
# update-mime-database /usr/share/mime
```

5. `gnomevfs-info` コマンドを使用して、変更が有効になったかどうかを検証します。

```
$gnomevfs-info testing.xyz | grep MIME
MIME type : application/x-newtype
```

`testing.xyz` ファイルの MIME タイプが `application/x-newtype` として解決されることが表示されるはずです。

アプリケーションの MIME タイプの登録

アプリケーションを登録するには、`.desktop` エントリファイルに `MimeType` キーを作成し、各 MIME タイプをセミコロン区切りで列挙します。`MimeType` キーは、`Type` キーの値が `Application` である `.desktop` ファイルでのみ使用してください。`.desktop` ファイルの詳細は、[65 ページの「MIME タイプを追加または変更する方法」](#)を参照してください。

▼ MIME タイプにアプリケーションを登録する方法

1. `$XDG_DATA_HOME/applications` または `$XDG_DATA_DIRS/applications` ディレクトリに、アプリケーションの `.desktop` ファイルを作成します。

`.desktop` ファイルには、登録される各 MIME タイプをセミコロンで区切った値を持つ `MimeType` キーを含める必要があります。例: `MimeType=text/html;text/css;text/x-javascript`

注記 - `MimeType` キーは、`Type` キーの値が `Application` である `.desktop` ファイルでのみ使用するようしてください。`.desktop` ファイルの詳細は、[37 ページの「デスクトップエントリファイルの操作」](#)を参照してください。

2. アプリケーションデータベースを更新します。

```
# update-desktop-database
```

このコマンドは、`.desktop` ファイルと同じディレクトリに `mimeinfo.cache` ファイルを作成または更新します。このキャッシュファイルは、MIME タイプの検索を容易にするために使用されます。

3. `.desktop` ファイルと同じディレクトリに `defaults.list` ファイルを作成または更新します。

`defaults.list` ファイルは、特定の MIME タイプで使用するデフォルトアプリケーションを指定する標準テキストファイルです。ファイルの各行は、MIME タイプ、`=` 記号、デスクトップファイル ID (これはデスクトップエントリファイルのファイル名) で構成されます。詳細は、[例 6-3「ユーザーの defaults.list ファイル」](#)を参照してください。

注記 - アプリケーションの MIME タイプを登録することは、共有 MIME 情報仕様ではなく、XDG デスクトップエントリ仕様に含まれています。詳細は、<http://www.freedesktop.org/wiki/Standards/desktop-entry-spec> を参照してください。

例 6-3 ユーザーの defaults.list ファイル

```
[Default Applications]
application/pdf=evince.desktop
text/html=epiphany.desktop
text/plain=gedit.desktop
image/jpeg=eog.desktop
image/png=eog.desktop
text/xml=gedit.desktop
```

▼ MIME タイプをアプリケーションと関連付ける方法

1. アプリケーションのメニュー項目を追加します。
メニューに項目を追加する方法の詳細は、[40 ページの「メニューを追加する方法」](#)を参照してください。
2. アプリケーションのアイコンを `/usr/share/icons/theme-name/icon-size/apps` ディレクトリに追加します。
アイコンおよびテーマをインストールする詳細は、[48 ページの「テーマ用アイコンのインストール」](#)を参照してください。
3. アプリケーションが新しい MIME タイプを使用する場合は、次の手順を実行します。
 - a. ソース XML ファイルを MIME データベースに追加します。
詳細は、[64 ページの「MIME タイプの変更」](#)を参照してください。
 - b. MIME タイプのアイコンを `/usr/share/icons/theme-name/icon-size/mimetypes` に追加します。
アイコンおよびテーマの詳細は、[第4章「テーマのインストール」](#)を参照してください。
4. アプリケーションと MIME タイプを関連付けるには、`.desktop` ファイルに `MimeType` キーを含めます。
詳細は、[67 ページの「アプリケーションの MIME タイプの登録」](#)を参照してください。

◆◆◆ 第 7 章

スクリーンセーバーの管理

スクリーンセーバーとは、画面が使用されていないときに、画面上のイメージを置き換えるアプリケーションです。Oracle Solaris デスクトップのスクリーンセーバーアプリケーションは、XScreenSaver です。以降のセクションでは、XScreenSaver アプリケーションの設定を行う方法、およびスクリーンセーバーに使用可能なディスプレイを変更する方法について説明します。

この章では、スクリーンセーバーの設定を行う方法について説明します。この章では、スクリーンセーバーに使用可能なディスプレイを変更する方法についても説明します。

この章には次の情報が含まれます。

- [71 ページの「スクリーンセーバー設定の設定」](#)
- [72 ページの「スクリーンセーバーの見た目と使い心地の変更」](#)

スクリーンセーバー設定の設定

デフォルトのスクリーンセーバー設定は、`/usr/share/X11/app-defaults/XScreenSaver` ファイルに格納されます。スクリーンセーバー設定ツールを起動するには、`/usr/bin/` ディレクトリから `xscreensaver-demo` コマンドを実行します。「システム」メニューからスクリーンセーバー設定ツールを起動するには、「システム」->「設定」->「スクリーンセーバー」を選択します。

すべてのユーザーのデフォルトスクリーンセーバー設定の設定

すべてのユーザーのデフォルトスクリーンセーバー設定を行うには、XScreenSaver ファイルを変更します。または、XScreenSaver のダイアログを使用して `$HOME/.xscreensaver` ファイルを作成し、このファイルを XScreenSaver ファイルの場所にコピーします。

ユーザーのデフォルトスクリーンセーバー設定の復元

ユーザーのデフォルト設定を復元するには、ユーザーのホームディレクトリから `$HOME/.xscreensaver` ファイルを削除します。`$HOME/.xscreensaver` ファイルがない場合は、システムは XScreenSaver ファイル内のデフォルト設定を使用します。

注記 - XScreenSaver アプリケーションのデフォルトの表示動作では、ブランク画面を表示しません。

スクリーンセーバー設定の変更を有効にするには、次のコマンドを使用してスクリーンセーバー設定を再ロードします。

```
# xscreensaver-command -restart
```

スクリーンセーバー設定の変更

スクリーンセーバーアプリケーションの設定を変更するには、スクリーンセーバー設定ツールを使用できます。スクリーンセーバー設定を変更すると、設定はユーザーのホームディレクトリの `$HOME/.xscreensaver` ファイル内に格納されます。

スクリーンセーバーの見た目と使い心地の変更

XScreenSaver ファイルと `$HOME/.xscreensaver` ファイルには、スクリーンセーバー表示のリストが含まれています。スクリーンセーバーアプリケーションでは、ユーザーが 1 つ以上のスクリーンセーバー表示を選択できます。

▼ スクリーンセーバー表示を追加する方法

1. 表示用の実行可能ファイルを `/usr/lib/xscreensaver/hacks/` ディレクトリにコピーします。
2. スクリーンセーバー表示用のコマンドを XScreenSaver ファイルまたは `$HOME/.xscreensaver` ファイルに追加します。

ウィンドウ内ではなく全画面でスクリーンセーバー表示を実行するには、適切な引数を含めます。たとえば、全画面にスクリーンセーバー表示を表示するには、`-root` オプションを含めます。

スクリーンセーバー表示の無効化

Sun Ray™ クライアント上のすべてのユーザーのスクリーンセーバー表示を無効にするには、次のコマンドを入力します。

```
# pkg uninstall 'desktop/xscreensaver/hacks*'
```

注記 - XScreenSaver アプリケーションのプラグイン可能認証モジュール (PAM) サービス名は `dtsession` です。この名前は、以前のアプリケーションとの互換性のために使用されます。

◆◆◆ 第 8 章

セッションの管理

セッションとは、ログインからログアウトまでデスクトップを使用している間に費やす期間です。セッション中に、ユーザーはアプリケーションを使用したり、出力したり、Web をブラウズしたりする可能性があります。デスクトップにログインするとセッションが開始します。

- 75 ページの「セッションマネージャーの概要」
- 75 ページの「セッションのデフォルトの設定」

セッションマネージャーの概要

セッションマネージャーは、ユーザーがセッションを管理できるようにします。たとえば、ユーザーはセッションの状態を保存して、次回ログインしたときにそのセッションに復帰することができます。次のアプリケーションは、セッション内で実行されます。

- セッションマネージャー `gnome-session`
- GConf X 設定デーモン `gnome-settings-daemon`
- `gnome-panel` アプリケーション
- `metacity` または `compiz` ウィンドウマネージャー (グラフィックスカードの性能によって異なる)

セッションのデフォルトの設定

一部のアプリケーションは、ログイン時に自動的に起動するように構成されている可能性があります。起動するアプリケーションを指定するには、`Freedesktop Application Autostart Specification` での定義に従い、適切なディレクトリに各アプリケーションの `.desktop` ファイルを配置します。ログインすると、次の順序で次のディレクトリにおいて `.desktop` ファイルが検索されます。

1. `~/.config/gnome-session/saved-session` ディレクトリ。

2. `$XDG_CONFIG_HOME/autostart` ディレクトリ。`$XDG_CONFIG_HOME` 環境変数が設定されていない場合は、`~/.config/autostart` デフォルトディレクトリ内で検索されます。
3. `$XDG_CONFIG_DIRS` 内にある各ディレクトリの `autostart` サブディレクトリ。`$XDG_CONFIG_DIRS` 環境変数が設定されていない場合は、`/usr/share/gnome/autostart:/etc/xdg/autostart` デフォルトディレクトリリスト内で検索されます。
同じアプリケーションに対して競合する `.desktop` ファイルが見つかった場合は、最初に見つかった `.desktop` ファイルが優先されます。

アプリケーションの `.desktop` ファイルは、[37 ページの「デスクトップエントリファイルの操作」](#)で定義されている形式である必要があります。すべてのキーは、定義されているとおりに解釈されるべきですが、次の例外があります。これらの例外は、`autostart` ディレクトリ内の `.desktop` ファイルがメニューに表示されないことを考慮します。

- **Hidden キー** – `.desktop` ファイルで `Hidden` キーが設定されている場合、`.desktop` ファイルで記述されているアプリケーションは、インストールされている場合でも「アプリケーション」メニューに表示されません。`Hidden` キーは、`.desktop` ファイルを削除したりアプリケーションをアンインストールしたりせずに、頻繁には使用しないアプリケーションをメニューから削除するためのすばやい方法です。

`.desktop` ファイルで `Hidden` キーが `true` に設定されている場合、`.desktop` ファイルは無視される必要があります。複数のディレクトリに同じ名前の複数の `.desktop` ファイルが存在する場合、最初に見つかった `.desktop` ファイルの `Hidden` キーのみが考慮される必要があります。その `Hidden` キーが `true` に設定されている場合、その他のディレクトリ内の同じ名前のすべての `.desktop` ファイルも無視されます。

- **OnlyShowIn および NotShowIn キー** – `OnlyShownIn` エントリは、このアプリケーションを自動起動するデスクトップ環境を特定する文字列のリストを含みます。その他のすべてのデスクトップ環境はこのアプリケーションを自動起動しません。たとえば、`OnlyShowIn=GNOME;KDE` です。

`NotShowIn` エントリは、このアプリケーションの自動起動ができない文字列のリストを含みます。その他のすべてのデスクトップアプリケーションは、このアプリケーションを自動起動する必要があります。

注記 - 1 つの `.desktop` ファイルには、`OnlyShowIn` と `NotShowIn` のキーのうち 1 つのみが出現できます。

- TryExec キー – TryExec キーの値は、インストールされている実行可能プログラムと一致する必要があります。そうでない場合プログラムは自動起動しません。TryExec フィールドの値は、絶対パス、またはパスコンポーネントなしの実行可能ファイルの名前のどちらでもかまいません。実行可能ファイルの名前をパスコンポーネントなしで指定した場合、一致する実行可能プログラムを探すために、\$PATH 環境が検索されます。

すべてのユーザーのデフォルトセッションアプリケーションを設定するには、適切な `.desktop` ファイルを `/etc/xdg/autostart` ディレクトリに配置します。

デフォルトセッション設定の復元

ユーザーのデフォルトセッション設定を復元するには、次のディレクトリを削除します。

- `~/.config/gnome-session/saved-session`
- `$XDG_CONFIG_HOME/autostart`
- `~/.config/autostart` (`$XDG_CONFIG_HOME` が設定されていない場合)

デフォルトセッションとしての現在のセッションの保存

ユーザーのデフォルトセッションとして現在のセッションを保存するには、次のいずれかの手順を実行します。

- `gnome-session-save` コマンドを使用します。

```
$ gnome-session-save
```

- 「設定」メニューで、「自動起動するアプリケーション」を選択します。「オプション」タブで「現在実行中のアプリケーションを記憶しておく」を選択します。

現在実行中のアプリケーションごとに、`~/.config/gnome-session/saved-session` ディレクトリに `.desktop` ファイルが作成されます。

Yelp ヘルプブラウザの概要

Oracle Solaris デスクトップでは、Yelp ヘルプブラウザにヘルプを表示します。詳細は、「」Oracle Solaris 11.2 Desktop User's Guide 『の』[Yelp ヘルプブラウザの概要](#)を参照してください。

この章では、Oracle Solaris デスクトップシステムの Yelp ヘルプブラウザについて説明します。次の情報が含まれます。

- [79 ページの「オンラインヘルプのソースドキュメント」](#)
- [80 ページの「Open Source Metadata Framework ファイル」](#)
- [80 ページの「Rarian カタログ作成システム」](#)

オンラインヘルプのソースドキュメント

オンラインヘルプのソースドキュメントは XML ファイルです。XML ファイルは DocBook XML Version 4.1.2 文書型定義 (DTD) で記述されます。DocBook XML ファイルは `gnome-doc-utils` ユーティリティと一緒にインストールされたスタイルシートを使用して HTML に変換され、この HTML がヘルプブラウザに表示されます。DocBook XML の詳細は、<http://www.oasis-open.org/docbook/xml/> を参照してください。

ヘルプシステムは、Open Source Metadata Framework (OMF) ファイルおよびカタログ作成システムを使用します。

Open Source Metadata Framework ファイル

各ヘルプシステムマニュアルの XML ファイルには、関連付けられた Open Source Metadata Framework (OMF) ファイルがあります。OMF ファイルには、ヘルプブラウザで使用されるマニュアルに関する情報が含まれます。OMF ファイルは、.omf 拡張子を持ちます。

アプリケーションをインストールすると、OMF ファイルが `/usr/share/omf/application-name` ディレクトリにコピーされます。ヘルプドキュメントに関連付けられている OMF ファイルがある場合、ユーザーはヘルプブラウザからヘルプドキュメントにアクセスできます。OMF ファイルには、ヘルプドキュメントに関する次の情報が含まれます。

- ヘルプドキュメントの XML ファイルの場所
- ヘルプドキュメントのタイトル
- ヘルプドキュメントが属するサブジェクトカテゴリ

Rarian カタログ作成システム

Rarian はドキュメントカタログ作成システムです。Rarian の主な機能は、ヘルプブラウザの OMF ファイル内の情報を管理することです。アプリケーションをインストールすると、OMF ファイルが `/usr/share/omf/application-name` ディレクトリにコピーされます。

Rarian には、ヘルプドキュメントが属することができるサブジェクトカテゴリの階層が含まれます。OMF ファイルのドキュメントのサブジェクトカテゴリによって、ヘルプブラウザに表示される目次でのドキュメントの場所が決まります。

サブジェクトカテゴリの階層は、`/usr/share/librarian/Templates/lang/scrollkeeper_cl.xml` ファイルで定義されます。ドキュメントのサブジェクトカテゴリは、このファイルで指定されるカテゴリに対応する必要があります。Rarian の詳細は、ローカルの `/usr/share/librarian/` にインストールされているドキュメントを参照してください。コミュニティサイト <http://rarian.freedesktop.org/> も参照してください。

注記 - ヘルプの XML ファイルが新しい場所に移動した場合は、OMF ファイル内の場所を更新する必要があります。

◆◆◆ 第 10 章

Oracle Solaris デスクトップシステムのパフォーマンス向上

この章では、Oracle Solaris デスクトップシステムのパフォーマンスを向上する方法について説明します。

この章では、Oracle Solaris デスクトップシステムのパフォーマンスを向上するために変更できるいくつかの設定を示します。gconftool-2 コマンドを使用して、ユーザー設定の値を設定できます。この章のコマンド例では、ユーザー構成ソースの値を設定する方法を示します。

gconftool-2 コマンドの詳細、およびこのコマンドで使用可能なオプションについては、[第2章「GConfを使用したユーザー設定の管理」](#)を参照してください。

デスクトップ環境の最適化については、[『Optimizing the Oracle Solaris Desktop for a Multi-User Environment』](#)を参照してください。

この章には次の情報が含まれます。

- [81 ページの「CPU 使用率の削減」](#)
- [86 ページの「X Window System のネットワークトラフィックの削減」](#)
- [87 ページの「色の使用量の削減と表示品質の向上」](#)

CPU 使用率の削減

このセクションでは、Oracle Solaris デスクトップシステムの CPU 使用率を削減できる設定について説明します。これらの設定については、以降のセクションで説明します。

- [82 ページの「テーマオプションの使用」](#)
- [83 ページの「メニューのアイコン表示の無効化」](#)
- [83 ページの「パネルアニメーションの無効化」](#)
- [83 ページの「デスクトップの背景での単一色の使用」](#)
- [84 ページの「ファイルマネージャーのパフォーマンス向上」](#)

- 86 ページの「適切なウィンドウマネージャーの使用」

テーマオプションの使用

一部のウィンドウ境界テーマオプションでは、ウィンドウ境界を描画するために画像ファイルを読み込みます。その他のオプションでは、ウィンドウ境界を描画するためによりシンプルな手法を使用します。

Crux ウィンドウ境界オプションは画像ファイルを読み込むため、CPU リソースが限られているシステムでは速度が低下する可能性があります。CPU 使用率を削減するには、次のいずれかのウィンドウ境界オプションを使用します。

- Atlanta
- Esco
- AgingGorilla
- Bright
- Metabox

注記 - Metabox は、HighContrastInverse などのコントロール反転オプションと一緒に適切に動作しません。コントロール反転オプションでは Atlanta を使用します。

ウィンドウ境界テーマオプションを変更するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --type string \  
--set /apps/metacity/general/theme option-name
```

たとえば、Atlanta を使用するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --type string \  
--set /apps/metacity/general/theme Atlanta
```

または、「テーマ」設定ツールを使用して適切なオプションを選択できます。

ヒント - Metacity テーマビューアを使用すると、ウィンドウ境界オプションのパフォーマンスを測定したりオプションをプレビューしたりすることができます。Metacity テーマビューアを起動するには、次のコマンドを入力します。

```
# metacity-theme-viewer option-name
```

たとえば、Atlanta のパフォーマンスを測定したり Atlanta をプレビューしたりするには、次のコマンドを入力します。

```
# metacity-theme-viewer Atlanta
```

メニューのアイコン表示の無効化

メニューの一部の項目では、項目の横にアイコンが表示されます。この機能をオフにするには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --type bool \  
--set /desktop/gnome/interface/menus_have_icons false
```

パネルアニメーションの無効化

パネルは、アニメーションスタイルで表示/非表示にできます。パネルアニメーションは、「プロパティ」ダイアログを使用して有効または無効にできます。

パネルの両端に非表示ボタンがある場合は、一方の非表示ボタンをクリックすると、パネルがスライドして表示または非表示になります。パネルが `Autohide` に設定されている場合、マウスを画面の端に移動するとパネルがスライドして表示され、マウスを端から離すとパネルがスライドして非表示になります。パネルアニメーションが無効な場合、スライド効果はありません。パネルは突然表示または非表示になります。

パネルアニメーションをオフにするには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --type bool \  
--set /apps/panel/global/enable_animations false
```

デスクトップの背景での単一色の使用

デスクトップの背景に単一色を使用することで、Oracle Solaris デスクトップシステムで使用される色の数が削減されます。

デスクトップの背景に単一色を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
# gconftool-2 --type string \  
--set /desktop/gnome/background/picture_options none  
  
# gconftool-2 --type string \  
--set /desktop/gnome/background/color_shading_type solid  
  
# gconftool-2 --type string \  
--set /desktop/gnome/background/primary_color #hexadecimal-color
```

または、「背景」設定ツールを使用して、背景に単一色を選択できます。

ファイルマネージャーのパフォーマンス向上

ファイルマネージャーには、パフォーマンス関連の設定が含まれています。各パフォーマンス設定は、次の表で説明する 3 つの値のいずれか 1 つを取ることができます。

値	説明
always	ローカルファイルとその他のファイルシステム上のファイルの両方に対して処理を実行します。
local_only	ローカルファイルのみに対して処理を実行します。パフォーマンス設定を local_only に設定した場合、CPU 使用率は削減されます。
never	処理を実行しません。パフォーマンス設定を never に設定すると、CPU 使用率およびネットワークトラフィックが削減されます。

パフォーマンス設定を行うには、次のコマンドを使用します。

```
# gconftool-2 --type string \  
--set /apps/nautilus/preferences/show_icon_text value
```

次の表では、ファイルマネージャーのパフォーマンス設定について説明します。パフォーマンスを向上するには、設定の値を never に設定します。

設定	説明
show_icon_text	ファイルを表すアイコン内でテキストファイルの内容をプレビューします。
show_directory_item_counts	フォルダ内の項目数を表示します。
show_image_thumbnails	画像ファイルのサムネイルを表示します。
preview_sound	サウンドファイルの内容をプレビューします。

注記 - ファイルマネージャーのパフォーマンス設定は、次の手順を実行して設定することもできます。

1. ファイルマネージャーのウィンドウから「編集」->「設定」を選択します。
2. 「プレビュー」を選択します。
3. 設定する設定を選択します。

たとえば、show_image_thumbnails 設定を行うには、「サムネイルの表示」設定オプションを選択します。

サイドペインの無効化

ファイルマネージャーのパフォーマンスを向上するには、次のコマンドを入力してサイドペインをオフにします。

```
# gconftool-2 --type bool \  
--set /apps/nautilus/preferences/start_with_sidebar false
```

ツールバーの無効化

ファイルマネージャーのパフォーマンスを向上するには、次のコマンドを入力してツールバーをオフにします。

```
# gconftool-2 --type bool \  
--set /apps/nautilus/preferences/start_with_toolbar false
```

ロケーションバーの無効化

ファイルマネージャーのパフォーマンスを向上するには、次のコマンドを入力してロケーションバーをオフにします。

```
# gconftool-2 --type bool \  
--set /apps/nautilus/preferences/start_with_location_bar false
```

ヒント - **Ctrl + L** キーボードショートカットを使用して、必要なときにロケーションバーを表示できます。

デスクトップの背景のロックとデスクトップアイコンの非表示

ファイルマネージャーには、ユーザーがデスクトップの背景をロックしてデスクトップアイコンを非表示にできる設定が含まれます。パフォーマンスを向上するには、次のコマンドを入力してデスクトップの背景を無効にし、デスクトップアイコンを非表示にします。

```
# gconftool-2 --type bool \  
--set /apps/nautilus/preferences/show_desktop false
```

デスクトップの背景に適用されていた既存の色や壁紙は変更されません。たとえば、このオプションをオフにする前に緑の単一色の背景だった場合は、その後も緑の単一色の背景のままです。ただし、デスクトップの背景をオフにすると、このオプションをオンに戻すまで背景の色や壁紙を変更できなくなります。

デスクトップの背景を無効にすると、次の操作が禁止されます。

- ファイルマネージャーを使用して、デスクトップの背景のパターンや色を変更します。
- ごみ箱などのデスクトップオブジェクトを使用します。デスクトップオブジェクトはデスクトップに表示されません。

適切なウィンドウマネージャーの使用

デフォルトで、Oracle Solaris デスクトップは、グラフィックスハードウェアの性能に基づいて、ユーザーのログイン時に使用可能な 2 つのウィンドウマネージャーのうち 1 つを選択します。

- `compiz` – シェーディングや半透明性などの高度なグラフィカルエフェクトをサポートする合成ウィンドウマネージャー。ログインすると、システムはグラフィックスカードが Oracle Solaris 11 でハードウェアアクセラレーションをサポートしているかどうかを自動的にチェックします。
- `metacity` – 基本的な標準準拠のウィンドウマネージャー。ログインすると、システムはグラフィックスカードが Oracle Solaris 11 でハードウェアアクセラレーションをサポートしているかどうかを自動的にチェックします。

CPU 使用率を最小限にするには、Metacity ウィンドウマネージャーを選択するようにしてください。それには、次のいずれかの方法を実行します。

- `metacity` コマンドを `--replace` オプションで使用します。

```
$ metacity --replace &
```

- 「外観」設定ツールの「視覚効果」タブで、「なし」を選択します。

このセクションは、ただちに有効になり、次回ログイン時にも有効です。

X Window System のネットワークトラフィックの削減

このセクションでは、Oracle Solaris デスクトップシステムで X Window System のネットワークトラフィックを削減するために設定できる設定について説明します。

- テーマオプションの使用 – リモートディスプレイプロトコルでは、ピクセルブロック内のすべてのピクセルが同じ色の場合、ブロック内の全ピクセルは転送しません。

単一色を使用している X Window System のネットワークトラフィックを削減するには、次のいずれかのウィンドウ境界オプションを使用します。

- Atlanta
- Esco

詳細は、[82 ページの「テーマオプションの使用」](#)を参照してください。

- メニューのアイコン表示のオフ – メニューの一部の項目では、項目の横にアイコンが表示されます。アイコンが別のファイルシステム上にある場合、この機能によって X Window System のネットワークトラフィックが増加することがあります。この機能では、リモートホストにパネルが表示されているときにも X Window System のネットワークトラフィックが増加することがあります。

詳細は、[83 ページの「メニューのアイコン表示の無効化」](#)を参照してください。

X Window System については、[第12章「X Window System の操作」](#)を参照してください。

色の使用量の削減と表示品質の向上

多くのコンピュータシステムでは、24 ビットカラー (16,777,216 色) をサポートします。ただし、多くのユーザーはいまだに 8 ビットカラー (256 色) をサポートするシステムを使用しています。

Oracle Solaris デスクトップシステムでは、*Web セーフなカラーパレット*を使用します。このパレットは、216 色の汎用パレットで、8 ビットカラーをサポートするシステムで色の使用を最適化するように設計されています。ただし、Oracle Solaris デスクトップシステムの一部の表示コンポーネントは、24 ビットカラーをサポートするシステム向けに設計されています。

8 ビットカラーをサポートするシステムでは、次の表示上の問題が発生する可能性があります。

- ウィンドウ、アイコン、および背景画像が粗く表示される可能性があります。多くのテーマ、背景画像、およびアイコンは、Web セーフのカラーパレットにはない色を使用しています。パレットにない色は、もっとも近いものや近似値に置き換えられます。置換色の使用により、粗い表示になります。
- Web セーフのカラーパレットを使用しないアプリケーションでは、使用可能な色が少なくなります。Web セーフのカラーパレットを使用しない場合、色のエラーが発生する可能性があり、一部の色がアプリケーションのユーザーインターフェイスに表示されない可能性があります。一部のアプリケーションでは、色を割り当てることができない場合にクラッシュします。
- ユーザーが Web セーフのカラーパレットを使用するアプリケーションとこのパレットを使用しないアプリケーションとの間で切り替えるときに、色のフラッシュ現象が発生することがあります。Web セーフのカラーパレットを使用しないアプリケーションでは、カスタムのカラーマツ

プを使用している可能性があります。カスタムのカラーマップが使用されている場合、その他の表示コンポーネントの色が失われ、その結果表示されなくなる可能性があります。

Oracle Solaris デスクトップシステムの外観を 8 ビットカラーをサポートするシステム向けに最適化するには:

- Web セーフのカラーパレットを使用するテーマオプションを使用します – 一部のウィンドウ境界テーマオプションは Web セーフカラーパレット内にある色を使用するため、その他のウィンドウ境界オプションの 8 ビットカラー表示での粗い外観にはなりません。8 ビット表示モードで色表示を最適にする場合は Bright または Esco テーマを使用します。テーマオプションを変更する方法については、[82 ページの「テーマオプションの使用」](#)を参照してください。
- メニューのアイコン表示をオフにします – メニューの一部の項目は、項目の横にアイコンが表示されます。アイコンに Web セーフのカラーパレットにない色が含まれる場合、この機能によって使用される色の数が増えることがあります。この機能をオフにする方法については、[83 ページの「メニューのアイコン表示の無効化」](#)を参照してください。

◆◆◆ 第 11 章

Oracle Solaris デスクトップシステムでの機能の無効化

Oracle Solaris デスクトップには、特定機能へのアクセスを制限するために使用できる機能が含まれています。このような機能は、ユーザーがコンピュータで実行できるアクションを制限する場合に役立ちます。これらの機能はロックダウン機能とも呼ばれます。

デスクトップ環境を最適化する詳細は、『[Optimizing the Oracle Solaris Desktop for a Multi-User Environment](#)』を参照してください。

この章では、Oracle Solaris デスクトップシステムの特有機能を無効にする方法について説明します。この章には次の情報が含まれます。

- 89 ページの「ロックダウン設定の設定」
- 90 ページの「コマンド行操作の無効化」
- 91 ページの「パネル構成の無効化」

ロックダウン設定の設定

このセクションでは、ロックダウン設定を手動で設定する方法について説明します。機能を無効にするように GConf キーを設定することもできます。gconf-editor コマンドを発行することによって GConf エディタにアクセスするか、またはコマンド行で GConf キーを編集できます。GConf キーを設定する方法については、[第2章「GConf を使用したユーザー設定の管理」](#)を参照してください。

ロック画面の無効化

ロック画面機能を無効にするには、/apps/panel/global/disable_lock_screen キーを true に設定します。ロック画面機能を無効にすると、次の項目がパネルから削除されます。

- メインメニューから「画面のロック」メニュー項目
- 「パネルに追加」->「アクション」メニューから「ロック」メニュー項目
- メニューバーアプレットの「アクション」メニューから「画面のロック」メニュー項目

また、パネル上のすべての「画面のロック」ボタンも無効になります。

ログアウトの無効化

ログアウト機能を無効にするには、`/apps/panel/global/disable_log_out` キーを `true` に設定します。ログアウト機能を無効にすると、次の項目がパネルから削除されます。

- メインメニューから「user のログアウト」メニュー項目
- 「パネルに追加」->「アクション」メニューから「ログアウト」メニュー項目
- メニューバーアプレットの「アクション」メニューから「user のログアウト」メニュー項目

また、パネル上のすべての「画面のロック」ボタンも無効になります。

コマンド行操作の無効化

コマンド行からの操作を無効にするには、`/desktop/gnome/lockdown/disable_command_line` キーを `true` に設定します。

コマンド行操作を無効にすると、ユーザーインターフェイスで次の変更が発生します。

- 「アプリケーションの実行」メニュー項目が次のメニューから削除されます。
 - メインメニュー
 - 「パネルに追加」メニューの「アクション」サブメニュー
 - メニューバーアプレットの「アクション」メニュー
- パネル上のすべての実行ボタンが無効になります。

コマンド行操作を無効にするには、端末アプリケーションを起動するメニュー項目を削除する必要があります。たとえば、次のコマンドが含まれるメニュー項目をメニューから削除します。

- `/usr/bin/gnome-terminal`
- `/usr/bin/xterm`
- `/usr/bin/setterm`

項目が次のメニューから削除されます。

- メインメニュー
- 「パネルに追加」-> メニューから「起動コマンド」

コマンド行操作を無効にするには、コマンド行アプレットを無効にする必要もあります。コマンド行アプレットを無効にするには、アプレットを `/apps/panel/global/disabled_applets` キーに追加します。コマンド行アプレットを無効にすると、コマンド行アプレットがメインメニューおよび「ユーティリティ」メニューから削除されます。

パネル構成の無効化

パネル構成を無効にするには、`/apps/panel/global/locked_down` キーを `true` に設定します。パネル構成を無効にすると、ユーザーインターフェースで次の変更が発生します。

- 次の項目がパネルのポップアップメニューおよび引き出しのポップアップメニューから削除されます。
 - パネルに追加
 - このパネルを削除する
 - プロパティ
 - 新しいパネル
- 次の項目がパネルオブジェクトのポップアップメニューから削除されます。
 - パネルから削除
 - ロック
 - 移動
- 起動ポップアップメニューは無効です。
- メインメニューのポップアップメニューは無効です。
- ユーザーがパネルへまたはパネルからランチャーをドラッグできないようにするため、ランチャーのドラッグ機能は無効です。
- ユーザーがパネルを新しい場所にドラッグできないようにするため、パネルのドラッグ機能は無効です。

◆◆◆ 第 12 章

X Window System の操作

この章では、Oracle Solaris OS で使用できる X Window System の概要について説明します。Oracle Solaris で使用できる X Window System は、Xorg に基づきます。Xorg の詳細は、コミュニティー Web サイト (<http://www.x.org/wiki/>) を参照してください。

この章には次の情報が含まれます。

- 93 ページの「X Window System の概要」
- 94 ページの「X サーバプロセスの理解」
- 95 ページの「X クライアントの操作」
- 97 ページの「Oracle Solaris での X サーバの構成」
- 99 ページの「X11 ディスプレイへのアクセス」

X Window System の概要

X Window System は、一般に X と呼ばれる、ネットワークベースのグラフィカルウィンドウシステムです。X Window System は、クライアントサーバアーキテクチャを使用します。複数のプログラムでハードウェアの共通セットを共有およびアクセスできます。このハードウェアには、サーバに接続されているマウス、キーボード、ビデオアダプタ、モニターなど、入力デバイスと表示デバイスの両方が含まれます。

X Window System は、X サーバと X クライアントで構成されます。X クライアントは、ディスプレイへの直接アクセスを持たないアプリケーションプログラムです。ディスプレイを描画する X サーバと通信します。

X アーキテクチャでは、クライアントおよびサーバが同じシステム上で、または異なるアーキテクチャの異なるシステム上で動作できます。X アーキテクチャは、クライアントサーバ通信用のストリームプロトコルを定義します。このプロトコルは、クライアントが別のマシン上のサー

バーに接続できるように、ネットワークを介して公開できます。そのため、自分のノートパソコンで X サーバが動作し、リモートシステムで動作している X クライアントによって表示が生成されるようにシステムを設定できます。

X サーバプロセスの理解

X サーバはハードウェアへのアクセスを制御する単一プロセスです。X サーバは、次の機能を実行します。

- 新しいクライアントからの着信接続を待機します
- 入力デバイスからの入力を追跡します
- クライアントのディスプレイアクセスを管理します

Oracle Solaris システムの構成によって、X サーバは次のいずれかのプログラムから開始されます。

- xdm (X デ스플레이マネージャ)
- gdm (GNOME デ스플레이マネージャ)

X クライアントは、TCP/IP、UNIX ドメインソケット、および数種類の SVR4 ローカル接続を使用して、X サーバに接続できます。クライアントのトランスポートタイプを指定する方法については、X(5) マニュアルページの DISPLAY NAMES のセクションを参照してください。

X サーバの操作

Oracle Solaris には、さまざまな用途に合わせて、現在数種類の X サーバが含まれています。次の表では、Oracle Solaris OS に含まれている X サーバの一部を示します。

X サーバ	説明
xorg	物理ハードウェア (入出力)、または物理ハードウェアをシミュレートする仮想化環境で使用されます。たとえば、xorg サーバは、Oracle VM Virtual Box ゲストを実行するとき、または Oracle ILOM サービスプロセッサのキーボード、ビデオ、マウス (KVM) 機能を使用するとき使用されます。
	詳細は、Xorg(1) のマニュアルページを参照してください。

X サーバー	説明
Xvfb	<p>システムの仮想メモリーを仮想フレームバッファとして割り当てるときに使用されます。どの入力デバイスからも入力を受け取らず、出力は表示されません。したがって、Xvfb サーバーが動作しているシステムには、画面や入力デバイスは必要ありません。</p> <p>詳細は、Xvfb(1) のマニュアルページを参照してください。</p>
Xephyr	<p>別の X サーバー (ホスト X サーバー) に表示されるウィンドウとして実行します。ホスト X サーバーの入力デバイスと表示デバイスを使用します。</p> <p>詳細は、Xephyr(1) のマニュアルページを参照してください。</p>
Xvnc	<p>VNC クライアントを使用して接続できる VNC セッションを実行します。共有接続では、複数の VNC クライアントが同じ VNC セッションに接続できます。vncviewer が Oracle Solaris 11 OS で使用できるデフォルトの VNC クライアントです。</p> <p>詳細は、vncserver (1) および vncviewer(1) のマニュアルページを参照してください。</p> <p>VNC を使用したりリモートデスクトップアクセスの設定方法については、101 ページの「VNC を使用したりリモートデスクトップアクセスの設定」を参照してください。</p>
Xdmx	<p>X クライアントを表示するために 1 つ以上の X サーバーを使用するプロキシ X サーバーとして使用されます。異なるマシン上に存在する可能性のあるディスプレイに対して X 機能を提供します。</p> <p>詳細は、Xdmx(1) のマニュアルページを参照してください。</p>
Xnewt	<p>Oracle Sun Ray 3 シリーズの DTU ハードウェアユニットや、Windows、MacOS、または iPad 用の Oracle Virtual Desktop Client などの Sun Ray クライアントとやり取りします。</p> <p>詳細については、http://docs.oracle.com/cd/E25749_01/index.html を参照してください。</p>

Oracle Solaris OS に含まれる X サーバーの詳細は、[Xserver\(1\)](#) のマニュアルページを参照してください。

X クライアントの操作

X クライアントは X サーバーに表示されるアプリケーションです。X クライアントは、1 つ以上のウィンドウマネージャーおよびほかのアプリケーションで構成されます。X クライアントは、X サーバーと同じシステム上で実行することも、別のシステム上で実行することもできます。X

Window System では、任意の数のクライアントを同時に実行できます。次の表に X クライアントをいくつか示します。

X クライアント	説明
twm	<p>ウィンドウマネージャーは、X Window System の見た目と使い心地を担当します。ウィンドウマネージャーは、タイトルバー、形状指定 (shaped) ウィンドウ、アイコン管理、ユーザーが定義したマクロ関数、クリック入力およびポインター駆動によるキーボードフォーカスを提供します。</p> <p>Oracle Solaris デスクトップで一般的なウィンドウマネージャーの一部を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Metacity ウィンドウマネージャー ■ Compiz ウィンドウマネージャー ■ Tab ウィンドウマネージャー <p>詳細は、<code>metacity (1)</code> および <code>twm(1)</code> のマニュアルページを参照してください。</p>
xterm	<p>X Window System で標準の端末エミュレータ。複数の端末ウィンドウを開いて、複数のアプリケーションを同時に実行できます。</p> <p>詳細は、<code>xterm(1)</code> のマニュアルページを参照してください。</p>
xdm	<p>X Window System 用のディスプレイマネージャー。<code>xdm</code> は、ローカルおよびリモートのサーバー上の X ディスプレイを管理します。</p> <p>詳細は、<code>xdm(1)</code> のマニュアルページを参照してください。</p>
xcalc	<p>X Window System の関数電卓。</p> <p>詳細は、<code>xcalc(1)</code> のマニュアルページを参照してください。</p>
xclock	<p>アナログまたはデジタル形式で時間を表示します。</p> <p>詳細は、<code>xclock(1)</code> のマニュアルページを参照してください。</p>
xset	<p>X Window System のユーザー設定ユーティリティー。<code>xset</code> ユーティリティーは、さまざまなユーザー設定表示オプションを設定するために使用されます。</p> <p>詳細は、<code>xset(1)</code> のマニュアルページを参照してください。</p>
xfd	<p>X フォントのすべての文字を表示するユーティリティー。<code>xfd</code> ユーティリティーは、表示されているフォントの名前、コマンドボタンの 1 行、文字メトリックスを表示するためのテキストの行数、およびセルあたりグリフ 1 つが格納されたグリッドが含まれるウィンドウを作成します。</p> <p>詳細は、<code>xfd(1)</code> のマニュアルページを参照してください。</p>

Oracle Solaris での X サーバーの構成

Xorg サーバーは、自動的に構成されるように設計されていて、ほとんどの状況で構成ファイルを編集する必要なく実行できます。構成が必要な場合、Xorg サーバーは次のソースから構成の詳細を収集します。

- `xorg.conf` および `xorg.conf.d` ファイル
- Oracle Solaris SMF 構成プロパティ
- HAL `fdi` ファイル

以降のセクションでは、構成ソースの詳細について説明します。

Xorg 構成ファイルの操作

`xorg.conf` ファイルは、Xorg サーバーの構成ファイルであり、`/etc/X11/` ディレクトリにあります。

注記 - デフォルトでは、デフォルト構成を変更するためにシステム管理者が作成するまで、`xorg.conf` 構成ファイルは存在しません。

`xorg.conf` 構成ファイルからの次の抜粋は、入力デバイスとモニターのセクションを示しています。

```
Section "InputDevice"
    Identifier "Keyboard0"
    Driver     "kbd"
EndSection

Section "InputDevice"
    Identifier "Mouse0"
    Driver     "mouse"
    Option     "Protocol" "auto"
    Option     "Device"   "/dev/mouse"
    Option     "ZAxisMapping" "4 5 6 7"
EndSection

Section "Monitor"
    Identifier "Monitor0"
    VendorName "Monitor Vendor"
    ModelName  "Monitor Model"
EndSection
```

`xorg.conf` ファイルが必要な場合は、変更されているセクションを示す必要があります。指定されていないセクションは、デフォルト値が使用され続けます。追加の内容が `/etc/X11/`

xorg.conf.d などのディレクトリ内に存在するすべてのファイルから読み取られ、基本の構成ファイルとマージされます。構文、検索パス、使用可能なオプションについては、xorg.conf(4) のマニュアルページを参照してください。

サンプル構成のスニペットと例については、/etc/X11/xorg.conf.avail ファイルを参照してください。たとえば、**Ctrl+Alt+Backspace** キーストロークを使用して X サーバーを停止するには、/etc/X11/xorg.conf.avail/90-zap.conf ディレクトリを参照してください。このオプションを使用するには、/etc/X11/xorg.conf.d ディレクトリにコピーまたはリンクします。

```
# ln -s ../xorg.conf.avail/90-zap.conf /etc/X11/xorg.conf.d/90-zap.conf
```

X サーバーを再起動して変更を確認します。

```
# svcadm restart gdm
```

SMF 構成プロパティの操作

svc:/application/x11/x11-server SMF サービスを使用して、X サーバーのプロパティを構成できます。たとえば、TCP 接続を無効にし、X サーバーのデフォルト表示の深さを設定できます。SMF 構成プロパティについては、Xserver(1) マニュアルページの SMF PROPERTIES のセクションを参照してください。

次の例では、options/config_file プロパティの値を設定する方法を示します。

例 12-1 構成プロパティの設定

```
# svccfg -s svc:/application/x11/x11-server setprop options/config_file=xorg.conf
```

HAL fdi ファイルの操作

ハードウェア抽象化層 (HAL) システムデーモン hald によって読み取られる fdi ファイルを使用して、Xorg サーバーの入力デバイスを構成できます。

たとえば、マウスデバイスの Emulate3Buttons オプションで左右のボタンを一緒に押すと中央ボタンとして動作できるようにするには、次の XML 抜粋を /etc/hal/fdi/policy/30user/10-x11-3button.fdi ファイルに含めます。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<deviceinfo version="0.2">
```

```

<device>
  <!--Default X.org input configuration is defined in:
    /etc/hal/fdi/policy/30user/10-x11-input.fdi
  Settings here modify or override the default configuration.
  See comment in the file above for more information.

  To see the currently active hal X.org input configuration
  run lshal or hal-device(1m) and search for "input.x11*" keys.

  Hal and X must be restarted for changes here to take any effect -->

  <match key="info.capabilities" contains="input.mouse">
  <merge key="input.x11_options.Emulate3Buttons" type="string">on</merge>
</match>
</device>
</deviceinfo>

```

lshal コマンドは、HAL で認識されている使用可能な入力デバイスをチェックして、その入力デバイスで設定されているオプションを確認するために使用できます。詳細は、[lshal\(1M\)](#)、[hal\(5\)](#)、および [fdi\(4\)](#) のマニュアルページを参照してください。

X11 ディスプレイへのアクセス

X サーバーは、サーバーにアクセスできるクライアントを制御します。サーバーへのアクセスを持つクライアントは、画面にウィンドウまたはイメージを表示したり、キーボード入力を受け取ったり、マウスの動きをモニターしたり、システム上の別のクライアントとやり取りしたりできます。Oracle Solaris の Trusted Extensions 機能は、セキュリティ機能を追加することで、ラベル付きクライアントがそれぞれのセキュリティ範囲を超えて X11 ディスプレイにアクセスできないようにします。詳細は、『[Trusted Extensions Label Administration](#)』を参照してください。

デフォルトでは、Oracle Solaris デスクトップは、ランダムに生成された Cookie の値をファイルに格納することにより、ユーザーによって実行される X サーバーおよびクライアントへのアクセスを許可するように構成されます。クライアントアプリケーションでは、X サーバーへの新規接続を開くためにこの値が必要です。この値は、\$XAUTHORITY 環境変数 (セッションの開始時に GNOME ディスプレイマネージャーによって自動的に設定される) で参照されるファイルに格納されます。別のディスプレイ環境からアプリケーションを開始する場合は、クライアントの認証を開始できるようになる前に、\$XAUTHORITY 変数をその環境にコピーする必要がある場合があります。

X11 ディスプレイへのアクセスの詳細は、[xhost\(1\)](#)、[xauth\(1\)](#)、および [Xsecurity\(5\)](#) のマニュアルページを参照してください。

その他のユーザーアカウントに対するディスプレイへのアクセスの提供

ディスプレイへのアクセスをローカルシステム上の別のユーザー ID に許可するには、`xhost (1)` コマンドの `si:localuser` オプションを使用します。

次の例は、正しい権利プロファイルを持つユーザーアカウントを構成し、SMF サービスビジュアルパネルのユーザーインターフェースを実行する方法を示しています。

例 12-2 `root` アカウントが GUI を表示することを許可

```
user@host:~$ xhost +si:localuser:root
user@host:~$ su
Password:
```

```
    /**Visual Panel GUI**/
# /usr/bin/vp svcs
```

注記 - `su` コマンドを使用して環境変数をリセットする場合は、`su` セッションの `DISPLAY` 環境変数を元のユーザーの環境で設定されている `DISPLAY` 変数と一致するように設定する必要があります。

```
user@host:~$ xhost +si:localuser:root
user@host:~$ echo $DISPLAY
:11

user@host:~$ su
Password:

# export DISPLAY=:11
# /usr/bin/vp svcs
```

`:11` の値は、各 Sun Ray ユーザーセッションによって異なります。ワークステーションでは、通常、メインコンソールディスプレイに `:0` の値を持ちますが、追加ディスプレイがあることもあります。

詳細は、`Xhost(1)` のマニュアルページを参照してください。

リモートマシンからのクライアントの表示

デフォルトでは、Oracle Solaris 11 はセキュアになるように構成され、ほかのマシンから TCP プロトコルを使用した X11 直接接続は受け付けません。別のマシンからクライアントを表示するには、ssh コマンドの X11 トンネリングオプションを使用します。

TCP 上の直接かつ非トンネル X11 接続を設定するために `svc:/application/x11/x11-server` SMF サービスの構成を変更する方法の説明については、`Xserver(1)` のマニュアルページを参照してください。

注記 - 手動接続を行う場合は、`DISPLAY` および `XAUTHORITY` 環境変数を適切に設定する必要があります。SSH の X11 トンネリングオプションを使用する場合、これらの環境変数は自動的に設定されます。

次の例では、デスクトップ `host1` に `host2` のパッケージマネージャー GUI を表示する方法を示します。

例 12-3 リモートマシンからのクライアントの表示

```
user@host1:~$ ssh -X admin@host2
Password:
Last login: Fri Apr  6 19:20:18 2012
Oracle Corporation      SunOS 5.11      11.1      March 2012

admin@host2:~$ /usr/bin/packagemanager
```

詳細は、[ssh\(1\)](#)、[Xsecurity\(5\)](#)、および [xauth\(1\)](#) のマニュアルページを参照してください。

VNC を使用したリモートデスクトップアクセスの設定

仮想ネットワークコンピューティング (VNC) は、あるコンピュータデスクトップ (Xvnc サーバー) を別のコンピュータデスクトップの VNC ビューアを使用して表示し、操作することを可能にするリモートソフトウェアアプリケーションです。2 つのコンピュータで同じ種類のオペレーティングシステムを実行している必要はありません。Xvnc は、ゲストメインのグラフィカルログインを提供します。

このセクションでは、ゲストグラフィカルログインを提供するように VNC サーバーを設定する方法について説明します。このセクションでは、VNC を手動で起動したりシステムブート時に起動したりする方法の手順についても説明します。

`vncpasswd` コマンドを使用して、VNC デスクトップにアクセスするために使用されるパスワードを設定します。パスワードはサーバー上に格納されます。詳細は、`vncpasswd(1)` のマニュアルページを参照してください。

▼ ゲストのグラフィカルログインを提供するように VNC を設定する方法

1. スーパーユーザーになるか、`root` 役割になります。
2. `/etc/gdm/custom.conf` ファイルを編集して XDMCP 接続を有効にします。

```
[xdmcp]
Enable=true
```

3. GDM サービスを再起動します。

```
# svcadm restart gdm
```

注記 - GDM サービスを再起動すると、すべての対応する GDM セッションが終了します。

4. `Xvnc inetd` サービスを有効にします。
5. ほかのマシンから接続して、ログイン画面が表示され、デスクトップセッションにログインできることを確認します。

```
# vncviewer hostname:port number
```

hostname サービスが実行されたホストの名前。

port number 接続するホスト上のポート番号を示します。

例:

```
# vncviewer myhost:2
```

▼ VNC を手動で起動する方法

ユーザーは、VNC を手動で起動できます。VNC パスワードが必要です。



注意 - VNC パスワードはユーザーの UNIX ログインパスワードとは異なるようにしてください。VNC パスワードはディスク上やネットワーク経由でセキュアにエンコードされません。

1. スーパーユーザーになるか、root 役割になります。

2. VNC サーバーを起動します。

```
# /usr/bin/vncserver
```

3. VNC サーバーパスワードを入力します。

```
Password:  
Verify:
```

```
New 'myhost:2 ()' desktop is myhost:2
```

```
Creating default startup script /home/user1/.vnc/xstartup  
Starting applications specified in /home/user1/.vnc/xstartup  
Log file is /home/user1/.vnc/myhost:2.log
```

4. `vncserver` コマンドで報告されたアドレスを使用して、別のマシンから `vncviewer` コマンドを実行します。

```
#
```

```
vncviewer hostname:
```

```
portnumber
```

例:

```
# vncviewer myhost:2
```

5. 指定したパスワードを `vncserver` スクリプトに入力します。

ログイン画面が表示され、デスクトップセッションにログインできることを確認します。

◆◆◆ 付録 A

A

隠しディレクトリ

この付録では、Oracle Solaris デスクトップシステムがユーザーのホームディレクトリに追加する隠しディレクトリについて説明します。

隠しディレクトリは、ユーザーの設定を格納したりユーティリティの状態を保持したりするために広く使用されます。隠しディレクトリの名前は、ピリオド (.) で始まります。次の表では、Oracle Solaris デスクトップシステムがユーザーのホームディレクトリに追加する隠しディレクトリについて説明します。

表 A-1 ユーザーのホームディレクトリにおける隠しディレクトリ

ディレクトリ	説明
.config	ユーザー構成情報が含まれます。XDG_CONFIG_HOME 環境変数が設定されていない場合、.config ディレクトリがこの変数のデフォルトの場所になります。ユーザー定義のメニューは、menus/applications.menu に作成できます。
.fonts	特定ユーザー専用のフォントが含まれます。
.esd_auth	サウンドデーモンの認証 Cookie が含まれます。サウンドデーモンは Enlightened Sound Daemon (ESD) です。 注記 - これはファイルであり、ディレクトリではありません。
.gconf	ユーザーの GConf 構成ソースが含まれます。ユーザーが設定を行うと、新規設定情報がこの場所に追加されます。
.gconfd	GConf デーモンに関する次の詳細が含まれます。 <ul style="list-style-type: none">■ 構成情報■ 相互運用オブジェクト参照 (IOR) によって参照されるオブジェクトのロック情報■ IOR によって参照されるオブジェクトの状態情報
.gnome2	GConf リポジトリに格納されていないユーザー固有のアプリケーションデータが含まれます。たとえばこのディレクトリには次の項目が含まれます。 <ul style="list-style-type: none">■ キーボードショートカット情報■ ウィンドウ位置情報■ パネルランチャーのデスクトップエントリファイル

ディレクトリ	説明
	このディレクトリには、アプリケーション固有のデータを格納するサブディレクトリも含まれる場合があります。
.local/share	XDG_DATA_HOME 環境変数の値が設定されていない場合のデフォルトの場所を指定します。ユーザー定義のデスクトップエントリは、applications サブディレクトリに作成できます。ユーザー定義の MIME タイプは、mime/packages/Overrides.xml ファイルに作成できます。
.nautilus	ユーザーに固有のファイルマネージャーデータが含まれます。たとえば、このディレクトリには次の情報が含まれる可能性があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ユーザーが作業するディレクトリのメタデータ ■ ユーザーが追加する Nautilus エンブレム ■ Nautilus デスクトップの背景画像
.themes	ユーザーが追加するコントロールテーマオプション、ウィンドウ境界テーマオプション、アイコンテーマオプションが含まれます。ユーザーは「テーマ」設定ツールからテーマを追加できます。
.thumbnails	ユーザーの画像のサムネイルが含まれます。画像のサムネイルは、ファイルマネージャーで使用されます。ファイルマネージャーには、サムネイル画像の生成を停止するためにユーザーが選択できる設定が含まれます。

用語集

アプリケーションレジストリ	アプリケーションを登録するテキストファイルが含まれる場所。デスクトップのアプリケーションレジストリは、 <code>/usr/share/gnome/application-registry</code> ディレクトリに存在します。
スクリーンセーバー	画面が使用されていないときに、画面上のイメージを置き換えるアプリケーション。Oracle Solaris デスクトップシステムのスクリーンセーバーアプリケーションは、 <code>XScreenSaver</code> です。
スクリーンセーバー表示	画面が使用されていないときに、ユーザーの画面にイメージを表示するアプリケーション。
ディレクトリエントリファイル	メニューに関する情報を提供するデータファイル。ディレクトリエントリファイルは、メニューの名前、メニューのツールチップ、およびメニューを表すアイコンの詳細を指定します。ディレクトリエントリファイルは、 <code>.directory</code> ファイル拡張子を持ちます。
デスクトップエントリファイル	メニューの項目に関する情報を提供するデータファイル。デスクトップエントリファイルは、名前、実行するコマンド、およびアイコンを指定します。デスクトップエントリファイルは、 <code>.desktop</code> ファイル拡張子を持ちます。
パターンマスク	ファイルタイプ判別パターン内の一連の 16 進数文字。パターンマスクは、ファイルでパターンを検索するときに、パターンで無視するビットを特定します。
ファイルタイプ判別パターン	ファイルタイプ判別パターンは、ファイル内の検索パターンを指定します。ファイルタイプ判別パターンは、パターンを MIME タイプと関連付けます。パターン的一致が見つかった場合は、パターンと関連付けられている MIME タイプがそのファイルの MIME タイプです。
CLI	コマンド行インタフェース。
GConf 構成ソース	GConf リポジトリ内の保管場所。たとえば、 <code>xml:readonly:/etc/gconf/gconf.xml.defaults</code> 。
GConf スキーマ	スキーマキーとスキーマオブジェクトの総称。
GConf スキーマオブジェクト	設定キーに関する情報を含む構成ソースの要素。スキーマオブジェクトは、設定キーのデフォルト値などの情報や、設定キーに関するドキュメントを含みます。
GConf スキーマキー	設定キーのスキーマオブジェクトを格納するキー。たとえば、 <code>/schemas/desktop/gnome/interface/font_name</code> は <code>/desktop/gnome/interface/font_name</code> 設定キーのスキーマキーです。

GConf スキーマ定義ファイル	特定アプリケーションのキーを一覧表示し、キーの特性を定義するファイル。GConf スキーマは、スキーマ定義ファイルから生成されます。スキーマ定義ファイルは、 <code>.schemas</code> ファイル拡張子を持ちます。
GConf 設定キー	アプリケーション設定に対応する GConf リポジトリ内の要素。たとえば、 <code>/apps/gnome-session/options/show_splash_screen</code> キーは、「セッション」設定ツールの「ログイン時にスプラッシュ画面を表示する」に対応します。
GConf パスファイル	GConf 構成ソースおよびソースの検索順序を一覧表示するファイル。
glob パターン	パターンマッチング動作のインスタンス。
IOR	相互運用オブジェクト参照。CORBA オブジェクトに対する文字列参照。IOR は、オブジェクトを制御するためにメッセージを送信できる送信先のホスト名およびポートをエンコードします。IOR は、オブジェクトを特定するオブジェクトキーも含みます。
MIME	Multipurpose Internet Mail Extension。
MIME タイプ	MIME タイプは、ファイルの形式を特定します。MIME タイプによって、アプリケーションはファイルを読み取ることができます。たとえば、電子メールアプリケーションは <code>image/png</code> MIME タイプを使用して、Portable Networks Graphic (PNG) ファイルが電子メールに添付されていることを検出します。
MIME タイプ記述ファイル	MIME タイプをファイルタイプ判別パターン情報、ファイル拡張子、ファイル名パターンと関連付ける XML ファイル。
OMF ファイル	Open Source Metadata Framework ファイル。これは、マニュアルの XML ファイルと関連付けられているファイルです。OMF ファイルには、ヘルプブラウザで使用されるマニュアルに関する情報が含まれます。OMF ファイルは、 <code>.omf</code> ファイル拡張子を持ちます。
ORB	Object Request Broker。
Web セーフなカラーパレット	Web セーフなカラーパレットは、216 色の汎用パレットです。Web セーフなカラーパレットは、8 ビットカラーをサポートするシステムで色の使用を最適化するように設計されています。Web セーフなカラーパレットは、 <i>Netscape カラーパレット</i> や <i>Netscape カラーキューブ</i> とも呼ばれます。

索引

数字・記号

.menu ファイル 参照 メニュー定義ファイル

あ

アプリケーション

追加, 69

レジストリ, 67

色の使用量

削減, 87

ウィンドウマネージャー, 86

か

隠しディレクトリ, 105

キーボード

アクセシビリティ設定を GConf で設定, 23

ショートカット設定を GConf で設定, 24

機能の無効化

コマンド行, 90

パネル構成, 91

クライアントの表示, 101

個別のパネル

パネルの構造, 24

さ

削減

CPU 使用率, 81

X Window System のネットワークトラフィック, 86

色の使用量, 87

スキーマ

スキーマオブジェクト, 16

スキーマキー, 16

スキーマ定義ファイル

概要, 17

説明, 16

スクリーンセーバー

概要, 71

スクリーンセーバー表示の変更, 72

すべてのユーザーの設定, 71

設定, 71

設定の変更, 72

表示の無効化, 73

ユーザーの設定の復元, 72

スプラッシュ画面

イメージ, GConf で設定, 32

セッション

概要, 75

現在のセッションの保存, 77

デフォルトセッション設定, 77

デフォルトの設定, 75

設定値

GConf で設定, 21

GConf でデフォルトに復元, 32

その他のユーザーアカウントに許可

ディスプレイへのアクセス, 100

た

ディスプレイへのアクセスの提供, 100

ディレクトリエントリファイル, 36

テーマ

アイコンオプション

インストール, 48

インデックスファイル, 46

ウィンドウ境界オプション

インストール, 47

および CPU 使用率, 82

および色の使用量, 88

およびネットワークトラフィック, 86

変更, 82

- および CPU 使用率, 82
- および色の使用量, 88
- およびネットワークトラフィック, 86
- 概要, 45
- コントロールオプション
 - インストール, 47
 - カスタムの作成, 50
- 新規アイコンのインストール, 48
- テーマのインストール, 45
- デスクトップ
 - フォント設定, GConf で設定, 31
- デスクトップエントリファイル, 37
- デスクトップの背景
 - 無効化, 85

な

- ネットワークトラフィック, 削減, 86

は

- 背景
 - 設定, GConf で設定, 31
 - 単一色の使用, 83
- パネル
 - アニメーション, 無効化, 83
 - 設定, 個別, GConf で設定, 24
- パネルオブジェクト
 - パネルオブジェクトの構造, 24
- パフォーマンス, 向上
 - CPU 使用率の削減, 81
- 表示品質, 向上, 87
- ファイルマネージャー
 - サイドペイン, 無効化, 85
 - ツールバー, 無効化, 85
 - デスクトップの背景, 無効化, 85
 - パフォーマンス設定の変更, 84
 - メニューの追加, 40
 - ロケーションバー, 無効化, 85
- フォント
 - fontconfig, 52
 - GConf で設定, 30
 - X11 フォントシステム, 53
 - 概要, 51
 - 個々のユーザーに対して追加, 53
 - すべてのユーザーに対して追加, 53

- 置換, 55
- フォントのカスタマイズ, 51
- フォントの追加, 52

ヘルプ

- OMF ファイル, 80
- ソースドキュメント, 79

ま

- メニュー
 - 概要, 33
 - 項目の追加, 40
 - システムメニューのマージ, 43
 - ファイルマネージャーを使用して追加, 40
 - プロパティの編集, 41
 - 編集, 39
 - メニュー項目の削除, 41
 - メニュー項目の編集, 41
 - メニューのマージ, 43
 - ユーザーメニューの編集, 42
- メニューアイコン
 - および CPU 使用率, 83
 - および色の使用量, 88
 - 無効化, 83
- メニュー定義ファイル, 34
- メニューの編集, 39

ら

- リモートデスクトップアクセス, 101
- リモートマシン
 - 表示, 101
- ログアウトの無効化, 90
- ロック画面, 89
- ロック画面の無効化, 89
- ロックダウン設定, 89

わ

- ワークスペース
 - 数を GConf で設定, 23

C

- CPU 使用率

削減, 81

G

GConf

- HTTP プロキシ, 設定, 22
- 概要, 13
- キーボードショートカット, 設定, 24
- キーボードのアクセシビリティ, 設定, 23
- 構成ソース, 15
- コマンド行ツール, 19
- スキーマ, 16
- スキーマオブジェクト, 16
- スキーマキー, 16
- スキーマ定義ファイル
 - 概要, 17
- スプラッシュイメージ, 設定, 32
- 設定値, 設定, 21
- デフォルト設定値の復元, 32
- デーモン, 18
- 背景, 設定, 31
- パネルオブジェクト設定, 設定, 24
- パネル設定, 個別に設定, 24
- フォント, 設定, 30
- リポジトリ, 14
- ワークスペース数, 設定, 23

H

- HTTP プロキシ
 - GConf で設定, 22

M

- MIME タイプ, 57
- MIME データベース
 - MIME データベースのリフレッシュ, 62
- アプリケーションの追加, 69
- アプリケーションの登録, 67
- 概要, 57
- ソース XML ファイル, 62
- データベース, 58
- データベースの内容, 59
- 変更, 64
- 変更の確認, 64

O

- OMF ファイル, 80

R

- Rarian
 - 概要, 80

S

- SMF
 - 構成プロパティ, 98

V

- VNC, 101
 - ゲストのグラフィカルログイン, 102
 - 手動で起動, 102
 - リモートデスクトップアクセス, 101

X

- X11 ディスプレイ
 - X11 ディスプレイへのアクセス, 99
- X Window System
 - X クライアント, 95
 - X サーバー, 94
 - 概要, 93
- X Window System のネットワークトラフィック, 削減, 86
- X クライアント
 - 種類, 95
- X サーバー, 94
 - X サーバーの構成, 97
 - 種類, 94
 - プロセス, 94
- Xorg
 - HAL
 - ファイル, 98
 - 構成ファイル, 97

Y

- Yelp
 - 概要, 79

